雷の覇者

悠久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雷の覇者

【Ｎコード】
Ｎ５３１７Ｈ

【作者名】
悠久

【あらすじ】
主人公の響は魔導協会に所属する魔導士であり、その中でもトップクラスの実力を持つ七聖の一人です。その響が、とある任務によって魔導士育成学園である藤歌（とうか）学園に編入するところから物語が始まります。動き始める運命ははたしてどこにむかうのか？笑いあり、バトルあり、恋愛ありの学園小説です。

キャラ設定（前書き）

初めまして。作者の悠久の風です。

久々に書く小説です。

かなり文章・設定は下手だと思いますが、一生懸命書きますのでお願いします。

とりあえずキャラのプロフィールからです

キャラ設定

神楽坂（かぐらざか）　響（ひびき）

高校2年生一（転校生）

最年少で七聖の一人となった
二つ名は「瞬雷」
任務（極秘）で転校してきた　妹との2人暮らしをしている
転校先では正体を隠すために3重のリミッターをかけて力を制御している
家事全般は得意、特に料理が好き
左腕が義手であり普段は黒い手袋で覆っている

戦闘ランクはSS（リミッター時はA　リミッター1解除AA　リミッター2解除S　リミッター3解除SS）
雷を得意とし、神具「千雷（せんらい）」（刀）をつかう待機型は首飾り
普段は名刀「柳（やなぎ）」待機型は指輪（右手中指）
格闘戦が得意だが、距離に関係なく一通りの戦闘はこなせる

神楽坂（かぐらざか）　心（こころ）

高校1年生（転校生）

響の実の妹で補佐役
二つ名は「風精」
七聖候補といわれる実力者
兄と同じように2重のリミッターをつけている
家事が壊滅的にできない

戦闘ランクはＳ（リミッター時はＡ　リミッター1解除ＡＡ　リミッター2解除Ｓ）
風を得意とし、武器は自分の身長と同じくらいの扇「仙奈」風を操って中遠距離からの支援を得意とする
打撃武器、風を纏わせて斬撃武器にもなる　待機型は普通サイズの扇

真田（さなだ）　理沙（りさ）

高校2年生　２－Ａ

赤いロングストレートの髪が特徴の女の子
感情表現豊か（ツンデレ）
５年前に妖魔に襲われていたところを、七聖の一人「獄炎」と
当時その補佐をしていた響に助けられ、「獄炎」に憧れる
戦闘スタイルも「獄炎」に影響され、両手の手甲「竜麟」を使った格闘戦が得意
炎が得意
ちなみに、助けられた時の男の子が刀と雷を使うことは覚えているが、響だということには

気づいていない
戦闘ランクはＡ
「竜麟」の待機型はブレスレット

姫咲（ひめさき）　棗（なつめ）

高校１年生　１－Ａ

大人しく清楚な感じの女の子
成績優秀だがおとなしすぎるのが玉に瑕
理沙とは親友であり、幼馴染
５年前も理沙と一緒に妖魔に襲われ、助けられている
理沙とは違い、当時助けてくれた男の子が響と面影が似ていると思っている
武器は杖「シルヴィス」待機型は鳥の羽根のような髪飾り
戦闘ランクはＡ
遠距離からの砲撃や広域魔法、結界などのサポートが得意
ただし、攻撃はあまり好きではない

黒沢（くろさわ）　努（つとむ）

高校2年生　２－Ａ

ツンツンヘアーの男
クラスのムードメーカーで体力馬鹿
勉強は学年で最下位を争うほどできない
実技の成績だけはトップクラス
武器は銃「ガリオス」短剣「カリム」
右手に「ガリオス」を左手に「カリム」を逆手に持って戦う
メインは「ガリオス」による中遠距離攻撃だが、近距離戦闘もできる
戦闘ランクはＡＡ

鋼（はがね）　一心（いっしん）

響たちの通う学園の学園長で元七聖
二つ名は「斬鉄」だった

学園で唯一、響や心の素性を知っており、任務についても理解している
豪快な性格をしていて、響や心の親代わり

紅灯（くれないあかり）

七聖の一人
二つ名は「獄炎」

響や心の師匠にして姉代わり
五年前の妖魔大量発生事件の解決者の一人であり、リサと棗を助けた張本人

武器は神具手甲「陽炎（かげろう）」を使った格闘戦
戦闘ランクはＳＳＳであり、七聖の中でもトップクラス
七聖の副長である

キャラ設定（後書き）

次回は世界観を少し書きたいと思います。

世界観（前書き）

世界観を投稿しました。
細かい追加設定など本文の中などで紹介していきます

世界観

この世界では、魔法というものが日常に浸透しています。

魔法を使うには魔力が必要であり、ほとんどの人が大なり小なり生まれながらに魔力を持っています。

魔法を使う人のことを魔導士を呼び、大部分の魔導士は魔導協会に所属しています。

魔導協会の魔導士の仕事は、主に妖魔の殲滅、災害救助、魔法の悪用による事件の解決、被害を及ぼすようなマジックアイテムの回収などがあります。

この魔導協会の中でもトップクラスの実力者は七聖と呼ばれ、七聖には神具と呼ばれる強力な魔導媒体があたえられ、七聖の証とされている。

魔導媒体とは魔法を使う手助けをするもので、なくても魔法は使えますが、あったほうが効率が良いです。普通はほとんど武器の形をしており、武器としても使用される。

七聖には、独自捜査権限などが与えられており、現場の判断で行動や現地の魔導士に指示を出せる。

一般的には、七聖は顔を知られておらず、二つ名と神具のみが知られている。

七聖の二つ名と神具は以下の通りである

神風・・・神具「双神剣シルフィード」
獄炎・・・神具「絶手甲陽炎」
浄水・・・神具「聖杖アルテミス」
無影・・・神具「魔鎌ハルペー」
荊姫・・・神具「滅槍ベリウス」
金剛・・・神具「守護盾アイギス」
瞬雷・・・神具「霊刀千雷」

ちなみに、獄炎と瞬雷の神具の名前が全部漢字なのは、日本由来の神具だからです。

主人公が編入することになる藤歌学園は、魔導士を育成するための学園であり、世界各国にこのような学園があります。

世界観（後書き）

読んでくれてありがとうございました。

何か変なところや矛盾点などがあった場合はご指摘ください。

プロローグ（前書き）

ついに小説本編投稿！！
下手で読みづらい文章だと思いますがよろしくお願いします。

プロローグ

「何でこんなことになったんだか」
少年が口に出して疑問を口にする。
「おれの予定では後１周間は惰眠をむさぼっているはずだったんだが・・・」
両手いっぱいに持った荷物を、まだ誰も使ったことがないような玄関に置く。

「過ぎたことを言っていても仕方ありませんよ」
鈴のような声の少女が言う。

「とりあえず、明日は学園に編入するわけですから、今日はもうご飯を食べて早めに寝ましょう。」

「んで、その飯は誰が作るんだ？」

「私が作っていいんですか？」
満面の笑みで少年の見る。

「だよなぁ～。お前に家事は任せられないよなぁ、はぁ～」
そのようなことを言いながら、少年は調理道具がそろっているはずのキッチンへと向かって行った。
頭の中で何故このようなことになったのかを思い浮かべながら・・・

約１０時間前・・・

ここは魔導協会の中でも極一部の限られた者が入ることを許されたところ。
そこに、

カツン、カツン、カツン

と薄暗い通路に２つの足音が響きわたる。

一人は、まだ少年とも言える顔立ちの男。しかしその眼には迷いがなく力強い意志が感じられる。

もう一人は少女。身長は男の肩位で、ツインテールに縛った髪に、白いリボンが特徴である。
どことなく雰囲気が男と似たところがある。

「兄さん、今度の任務って何なんだろうね？」

そこで沈黙と薄暗さに耐えられなかったのだろう、少女が男に声をかけた。
どうやら二人は兄弟だったらしい。

「さぁな。姉さんからの呼び出しだから、あまり良い予感はしないな。俺としては前回の任務の疲れもあるし、もうちょっと寝て過ごしたかったけどな」

「もう、そんなこと言ってここ1週間ほとんど寝て過ごしてませんでしたっけ？」

「それだけ疲れてたってことだよ。それにな心。寝る子は育つんんだぞ。お前ももう少し寝ろ。そうすれば毎日毎日風呂上りにやっている特定部位が大きくなるマッサージもやらなくて済むんじゃないか？」

「特定部位って・・・／／／っ！兄さん！！そこは関係ないでしょ！っていうか何でそのことを知っているんですか！？」

「そりゃお前、愛する妹のことなら悩みから黒子の数まで何でも知ってるぞ。ハッハッハー。」

「ハッハッハーじゃないですよ。そんな事ある訳ないじゃ「最近の我が妹の体脂肪率が大台の」！！ワーワーワー／／／分かりました、分かりましたからー。それ以上は言わないでくださーい。うう、兄さんの意地悪。」

「まだまだだな、我が妹よ。」

と言いながら満足そうにほほ笑む兄に妹は批判気に視線を送りながら一歩距離をとる。
そのまま目の前に迫った扉を開け中に入る二人。

っとそこに、

「相変わらず仲が良いな、お前たちは」

と赤いまるで灼熱を思わせるような髪をなびかせながら、長身の女性が近付いてきた。

スラっと伸びる足に出るところは出る、引っ込むところは引っ込む、世の女性の憧れのようなプロポーションをした女性は、その兄弟を待っていたのか壁に背中を預け、腕組みをしながらこちらを見ている。

「姉さん！！」「お姉ちゃん」
兄弟は二人同時に声をあげた。

「こーら、響、心。ここではその呼び方はダメだって言わなかった？」
ニカっと太陽のような笑みを浮かべながら、女性は言った。

「あっと！七聖「瞬雷」神楽坂　響　只今出頭しました、副隊長。」

「同じく、その補佐、神楽坂　心　只今出頭しました。」

副隊長。そう、この女性が七聖の副隊長にしてその一人「獄炎」の紅　灯である。

「御苦労。今日ここにお前たちを呼び出したのは他でもない、お前たちには任務に就いてもらう。」

「はい、それは聞いています。ところでその任務内容は何なんですか？」

「今回の任務は少々特殊でな。潜入及び護衛任務になる。そのため割と長期になってしまうがな。」

「潜入と護衛・・・ですか？しかも七聖がでるような。それなら末席の私たちよりも「金剛」様や「荊姫」様に任せたほうがよろしくないでしょうか？」

「うむ、そのことなんだが、今回の潜入場所が問題でな。今回の任地は藤歌学園で、護衛対象はその生徒になるんだ。」

「藤歌学園って親父「ギロッ」一心さんが学園長をしている、日本最大の魔導士育成学園ですか？」

途中「獄炎」に睨まれ、言い直しながら尋ねる響。

「そうだ。その学園に今回「闇協会」が何らかのアプローチがある可能性があることが判明した。」

「闇協会ですか！？」

闇協会とは、魔法を悪用する魔法犯罪者や強力な魔力を持つ子供を誘拐し、勢力を伸ばしている組織である。その大義や活動場所などあらゆる情報が一切不明で、魔導協会が前々から追っている組織である。

「「無影」からの報告、さらには「浄水」の占いにも似たような暗示が出ていた。そこで、お前たちを生徒としてその学園に送り込み、秘密裏に生徒の護衛及び闇協会の排除をお願いしたい。一応、教師として送り込むことも考えたんだが、自由に動けないうえ生徒と四六時中一緒というわけにもいかんだろ。そこで適任だったのがお前たち兄弟だったわけだ。ちなみにこれは隊長である「神風」との協

議の結果であり、お前たち特に響には拒否権はない」

「強制ですか！？・・・分かりました、七聖が瞬雷、その任謹んで拝命いたします。」

「同じくその補佐、謹んで拝命します。」

なかば諦めた表情で承諾する響を横目に苦笑しながら、心も承諾した。

「そうか、そうか。お前たちなら引き受けてくれると思っていたよ。任務中は正体隠蔽のために響には3重の、心には2重のリミッターがつくからそのつもりで。住居はこちらで手配済みだから、そこで二人で住んでくれ。あと任務は明日からだからすぐに準備して現地に向かってくれ。そのほかの細かいところは書類に目を通しておけ。」

「「は？？」」

「強制したくせに・・・」とか心の中で考えつつも口には出さずに任務の概要を聞いていた2人は、同時に素っ頓狂な声をあげる。

「明日からですか！？」

困惑した表情で尋ねる心

「そうだが？」

ニヤニヤしながら返答する美女

「急すぎるだろ！オイ！？」

「事態は一刻を争うかも知れんだろ。」

「ふっざけんじゃねーー！！」

その後言い争いになった姉と兄を止めるに止められなかった妹は、最終的には炎のともった拳（比ゆではない）を顔面にくらって気絶した兄を引きずって任務の準備をした。

その後目を覚ました兄と共に任地に、これから過ごす住居へとたどり着き冒頭に戻る。

プロローグ（後書き）

どうだったでしょうか？
誤字や修正点なども受け付けているので、お願いします。
感想も待ってます。

次回は新たな出会いがあるかな？

第1話：初登校

結局あれから簡単な料理を作り、二人で食べてから寝たのは日付が変わった頃だった。

次の日の朝。

PiPiPiPi・・・PiPiPiPiPi・・・PiPiPiPi・・・PiPiPガチャ！！

「・・・ふあああぁぁぁぁ」

目覚ましが鳴る音で目を覚ました響は欠伸を一つして布団から出た。

彼、神楽坂　響の朝は早い。

現在朝の5時。普通の高校生ならまだ寝ている時間帯である。

しかし、彼にはこれから重要な任務が待っている。

それは・・・

「今日の朝飯は何作ろう・・・」

そう、朝食作りである。

眠い目を擦りながら制服に着替え顔を洗い、彼は冷蔵庫を開け中を確認する。

「卵にチーズ、ケチャップとバターっと。あとはパンがあったかな？」

そんなことを言いながら、材料を取り出す。

そして手早く卵をボールに割り、砂糖と塩で味付けし、暖めておいたフライパンで焼いていく。

さらに、パンの上にバターをぬり、その上にケチャップをぬる。

そこにチーズを載せてトースターで焼こうとした時、

「おはよぅ、兄さん」

パジャマ姿の妹が声をかけてきた。

「相変わらず、ちょうどよく起きてくるな。もうすぐで飯できるから、さっさと顔洗ってこい。」

「ふぁ～い」という緩い声を背中で聞きながら、先ほどのパンをトースターで焼いた。

「ごっちそうさまでしたぁ～、兄さん早く学校行こーよー」

えらく上機嫌な心が言う。

「なんでそんなに楽しそうなんだ？」

「だってだって、学校だよ～？私たち昔からお姉ちゃんと修行ばっかりだったし、勉強はお父さんに教わってたから必要なかったし。学校なんて行ったことなかったじゃん」
「だから一回学校行ってみたかったんだよ」っと言う妹を見て響は考えていた。

（姉さんはそのことも考えて俺たちにこの任務を与えてくれたのかもな）
普段はあまりやさしい一面を見せない姉を思い浮かべながら苦笑する。

「どうしたの兄さん？」

「なんでもねぇよ。そんじゃ行くか！忘れ物するんじゃねぇぞ」

「そんなに子供扱いしないでよ！大丈夫。持ち物は昨日のうちに確認したから。」
っと頬を膨らませながら言う妹を見ながら、ニヤニヤする兄響。

「なにょぅ」
そんな兄の様子を怪訝に思った妹は兄を睨む。

その視線をスルーしつつ
「そんじゃ行くぞ～。」
と言い玄関に向かう響

「待ってよ、兄さん」
そこで、あわてて突いてくる妹に

「ところでよ～、我が妹よ。その格好で学園に行くつもりか～？ニヤニヤ」

「・・・ッツ！？」

爆弾を投下した。

「いい加減、機嫌直せよ、心。俺はちゃんと指摘してやっただけだろ」

「いやです。兄さんは最初から気づいていました。何であのタイミングで指摘するんですか？」

「そりゃお前。その方が面白いからだろう♪。」

「やっぱり・・・はぁ」

諦めた表情で溜息をつく心。

そんなやり取りをしてるうちに二人はあるドアの前に着いていた。

ここは藤歌学園の学園長室に続く廊下である。

これから彼らは学園長であり、元七聖であり、彼らの義理の父親である鋼　一心に挨拶に行くところである。

コンコン「入りなさい」
響がノックすると中から威厳を漂わせる声で入室を許可された。
「「失礼します」」
そう言って中に入った二人の前には、大柄でがたいのよい６０歳くらいの男性が机をはさんで反対側の椅子に腰かけている。
「久しいの、二人とも」
「親父も久しぶりだな。元気そうで残念だ」
「こらっ、兄さん」
「ほぉっほぉっほぉ、そういうお前も元気そうだな、馬鹿息子よ。」
「おかげさまで」
お互いに皮肉を言いあい一段落し、さっそく本題に移る。
「本日付けでお前たちを我が藤歌学園の生徒として編入する。任務内容は聞いておろう？」
「「はい」」
先ほどとはうって変って、お互い真剣な表情で話し始める。
「相手の動きは全く掴めておらん。相変わらず訳の分らん奴らじゃ。お前たちにはその調査も含めて今回の任務に当たって欲しい」
「「了解」」
「うむ、さっそくだが、お前さんらのクラスを言っておく。響は２

ーA、心は1ーAじゃ。さらに2人には学園の風紀委員に参加してもらう。」

「風紀委員ですか？」

「そうだ。風紀委員は学園内での魔法使用が認められておるし、ある程度の学校の権限も使える」

「護衛などがしやすくなるわけか」

「そうじゃ。風紀委員内では基本5人1組で班を作っているから、お前さんらの他にあと3人組んでもらうことになる。3人とも我が学園を代表する実力者じゃ。」

「わかりました。」
響が答える。

「その他にも、その5人で学外の依頼もこなすことになると思うから、仲良くするのじゃぞ」

「はい」
心が答える。この藤歌学園は一般の依頼の中でも難易度が低いものを生徒に経験を積ませる名目で、生徒が依頼をこなすことがあるのだ。

「その3人には事前に伝えてある。2人は響と同じクラスで、1人は心と同じクラスじゃ。まぁ、クラスに行けば分かるじゃろ。放課後には訓練場に集まるように。それでは各々健闘祈る」

「「了解」」

二人同時に頷き退出した。

退出した2人はそのまま職員室に行き、担任の先生に挨拶をして、職員室を出るところだ。

「いよいよですね、兄さん。」

「ああ、そうだな。なるようになるさ。じゃ、また放課後にな」

「はい、それでは」

2人はそれぞれ自分の担任に連れられて教室に向かった。

第1話：初登校（後書き）

予想よりちょっと長くなってしまいました。

次回には、他のキャラも出せると思います。

第2話：友との出会い（前書き）

第二話更新です。

今回はクラスメートとの話が中心になっています。

第2話：友との出会い

２－Ａ教室

私の名前は真田（さなだ）　理沙（りさ）
今日は学園長から聞いていた転校生が来る日だ。
はたしてどんな奴が来るのやら。まともな奴であって欲しい。

そこに
「理沙っち、理沙っち！今日ね、今日ね、このクラスに転校生がくるんだってさ～！ねぇねぇ聞いてるぅ～？」
彼女の名前は橋本（はしもと）　薫（かおる）。噂とかニュースが大好きな女の子である。

「はい、はい聞いてるから！少しは落ち着きなさい、薫。転校生のことは学園長から聞いてるわよ。なんでも風紀委員に入って私と同じ班になるみたいよ。」
と、腰まで届くかという長さの自慢の赤い髪をいじりながら椅子に座って私は言った。

「え？理沙っちと同じ班ってことは、努っちと棗っちとも同じ班ってこと？これで４人になったね。あれ？風紀委員って５人で１班じゃなかったっけ？」

「妹も一緒に転校してきて、風紀委員に入るみたいよ。だからこれで５人」

「なるほど～。これで理沙っちの班も本格始動ってわけだ。」
「そうね。先月から私たちだけ3人で組まされてたのは転校生のためだったみたいね」
「でも、理沙っちたちは優秀だから3人でも十分だったんじゃない？」
「そんなことないわよ。約1名体力バカがいるせいで、私たち2人が迷惑してるんだから。」
「アハハ、大変だね。そういえば、その努っちは今日はどうしたの？」
「あいつのことだからどうせ「はい、みんな席に着いてね～」って先生来たみたいよ」
「そうだね。じゃあまた後で」
そう言って薫は駆け足で席に戻って行った。
「はい、じゃあホームルームを始める前に、今日は転校生を紹介をしたいと思います。じゃあ、神楽坂君入ってきて～。」
先生の言葉に耳を傾けつつ、転校生のことを考えていた私は、思考を中断して前の教卓の方へと意識を向けた。

２－Ａ前廊下

「今のところ特に怪しい気配はないか・・・しかし、流石は日本最大の魔導士育成機関だな。なかなか大きな魔力をもった人が多いな。リミッターをかけているとはいえ、今の俺達と同じ位か。」

先生に「呼ばれたら入って来てね」っと言われ廊下に一人待たされていた響は、魔力探査の術式を誰にも気づかせずに展開し周囲を調べていた。

そして、年齢の割には大きな魔力反応に一人で関心の声を洩らす。

っとその時、「・・・思います。じゃあ、神楽坂君入ってきて～。」っという声がきこえた。

「よっしゃ、それじゃ行きますか」

そう言いながら教室のドアを開けて中へと足を進めた。

２－Ａ教室

黒板の前まで進んだ響は教室を見まわして、改めて自分が学校に来たことを実感していた。

「じゃあ神楽坂君、自己紹介をお願いします。」

っとある程度簡単な紹介を終えた先生が笑顔で言ってきた。

響は「はい」っと返事をして一歩前へ出る。

そして
「ただいま紹介されましたが、俺の名前は「バコンッ」・・・」
教室の一番後ろのドアが思いきり開かれるそこには、
「ふぅ、ぎりぎりセーフ」などと言って、額の汗を拭いているツンツンヘアーの男が立っていた。
「なーにが「ぎりぎりセーフ」なのかな？黒沢（くろさわ）　努（つとむ）君。」
っととびきりの笑顔をしている先生。
「あっ、え～と・・」
その笑顔を見て、おびえる努。今度は冷や汗をぬぐっくているようだ。
「今ちょうど転校生の紹介をしてたところなんだけど？」
「あっ、そうッス。転校生、転校生！俺達と同じ班を組むって聞いてた転校生の紹介に間に合ったって意味ッスよ」
「ふ～ん。じゃあ、黒沢君は遅刻っと。あとで職員室に来るようにね！わかったら席に着きなさい」
「あ～い、とほほ」
クラス中から苦笑が漏れているなか、響は（あいつと一緒の班になるのか？大丈夫か？）などと考えていた。
さらにその中に頭を抱えてうつむいている赤い髪の少女がいたことはご愛敬である。

その後無事に自己紹介・ホームルームも終了し、響は今クラスメートに囲まれていた。
転校生恒例の質問タイムである。
次々と質問されているが、流石の響きでも聖徳太子ではないため質問内容が把握できないでいた。

そこに
「はいはい、そんないっぺんに質問しても響っちが答えられないよ。ここはクラスを代表して、私こと橋本　薫が質問しちゃうよ。」
っと薫が名乗り出て、なんとかその場を収めた。

「では、第一問。響っちはどこの学校から転校したきたの？」

「いや、訳あって学校には通っていなかったんだ。だから、転校というよりは編入だな。ちなみに訳は話せないぞ。」

「わかりましたですよ。続いて第2問、響っちには妹がいると聞いたのですがホントですか？」

「ああ、本当だ。１－Ａに今日編入している。名前は心だ。この教室にも顔を出すと思うが、仲良くしてやってくれ。」

「心っちですか～。わかりました。続いて第「ちょっと待った！」
はい？」

「その響っちとか心っちっていうのは何だ？」

「なにって、愛情表現ですよ。私は友達には皆に「っち」をつけてるのですよ」
その返答に響は周囲を見た。クラスメート「諦めろ！それだけは直らん」っという表情を一瞬で読み取った響は「・・・そっか、好きに呼んでくれ」と潔く諦めた。

「じゃあ、ラスト。響っちって室内なのに左手だけ手袋してるよね？どうして？」
その質問はクラスメートのほとんどが気になっていたのか、皆しきりに頷いている。

「・・・昔にちょっと大きな火傷をしてな。あまり見せても良いもんじゃないから、普段から隠してるんだ。」
そう答える響に薫は「それは変なこと聞いてゴメンなのですよぅ」と口調が落ち込んでいた。

「気にすんじゃねーよ。俺は気にしてねーし。気にするってんなら、これから友達としてよろしくしてくれ。それでチャラだ。」
そう答える響に薫は笑顔になり

「わかったのですよ～。これからよろしくです。」
と言い、質問タイムが終わった。

「ふぅ〜」と息をついていると
「お疲れ様、響君。」と後ろから声を掛けられた。
振り向いてみると、赤い髪が特徴的な女の子と、ツンツン頭の遅刻してきた男がいた。
「おお、遅刻男だ」っと響が声をかけると
「誰が遅刻男だ！！俺の名前は黒沢　努。努でいいぞ、転校生。」
「この馬鹿は放っておいて、私の名前は真田　理沙。理沙でいいわ、響君」
「馬鹿とはなんだ、馬鹿とは〜」などという声は華麗にスルーし、
「俺は神楽坂　響だ。俺も響でいい。よろしく頼むよ、理沙。」
と微笑みながら挨拶をする。
「え、ええ、よろしく、響。」っと軽く頬を赤くしながら返事をする。
「さっそく本題に入るけど、響は風紀委員になるのよね？私はあなたと同じ班になるわ。その挨拶ってわけ。」
「ああ、学園長から聞いてるよ。そっか理沙が同じ班か。改めてよろしく。」
「ところで、もう一つ。おそらく嫌な情報があるけど聞いとく？」

「・・・だいたいさっきの騒動で想像はつくけど、一応。」

「・・・あそこの馬鹿も同じ班になるわ。」
っと教室の隅を指さす。
そこにはさっきまで騒いでいたが無視され落ち込んだ努が床にのの字を書いていた。

「・・・・・」
「・・・・・」

終始無言の2人。そして

「お互い苦労するわね、これから。」
「まぁ、他4人でフォローしてくしかないね」

などと妙なところで共感した2人は硬く握手をするのだった。

昼休み

「へ～、じゃあ、響は妹さんと2人で暮らしてるんだな。うらやましいぜ。家なんか頑固親父と住んでるんだぜ、まったくもうちょっと華が欲しいよな。」
その後説得により、なんとか機嫌を直した努と改めて自己紹介をして、努、理沙、薫の3人で昼食を食べていた。

「じゃあ、響っちのお弁当は心っちの手作りってわけだ。いやぁ～、愛されてるね、お兄さん。」
響は手作り弁当を持参していた。ちなみに昨日の夜のうちに簡単なものを作って冷凍しておいてあものである。
余談で、努と理沙は購買から買ってきたパンを、薫はお母さんが作った弁当を食べている。

「ん？いや、これは俺が作ったものだが？」
その答えに目を開いて驚く一同。

「響って料理できるの？」っと代表して理沙が聞くと、

「ああ。簡単なものは一通りできるし、難しいものもレシピ見たりしながらつくるぞ。心は料理がって言うより家事全般が壊滅的に才能がないからな。」

「壊滅的ってどんなのよ？」

「掃除をすれば家具が壊れ、洗濯をすれば服が布に戻り、料理をすれば毒物を作る。模様替えをすれば引っ越しでもできるんじゃないか？いや、模様替えは家事じゃないからセーフかな・・・ぶつぶつ」
などという響の言葉に3人の中の響の妹像がものすごいことになっていることに響は気が付いていない。

「まぁ、今日の放課後になれば嫌でも見れるしな。」

「そうね、それまでは考えないようにしましょ。」

「報告待ってるのですよ」

っと3人は自分を納得させた。

キーンコーンカーンコーン

時は過ぎて放課後。

ホームルームを終えた3人は訓練場へと向かっていった。

第2話：友との出会い（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございました。

今回は最初のほうが理沙視点で書かせてもらいました。

なかなか1人称してんから書くのは難しいですね。

次回はバトルを少し入れたいなと思います。

次回の更新も楽しみにしていてください。

第3話：模擬戦　心ＶＳ努（前書き）

ついにバトル部分の投稿です。

バトルものの小説は初めて書くので、うまく描写できてるか心配です。

第3話：模擬戦　心VS努

「来たようじゃの」

そう言って訓練場に入った響たちを出迎えたのは学園長である一心である。
その傍らには心と心より少し小柄の女の子が立っていた。
おそらく彼女が響の班の最後の一人だらう。

「兄さん」

「待たせたな、心。」
そう言ってこちらに駆け寄ってくる心を出迎えてやる。

「いえ、それより兄さん。そちらのお二人が？」

「ああ、同じ班を組むことになる、真田　理沙と黒沢　努だ。理沙、努こいつが俺の妹で心だ。よろしくしてやってくれ。」

「神楽坂　心です。兄がお世話になってます。これからよろしくお願いします。真田先輩、黒沢先輩」
心が自己紹介をした。

「あなたが心ちゃん？聞いてた話のイメージとは大分違うのだけど。私は真田　理沙よ。理沙でいいわ。」

「だよなぁ。まさかこんなに可愛い子だなんて・・・俺は黒沢　努だ。努でいいよ、心ちゃん。」
理沙の返答に頷きながら努も自己紹介をした。

「わかりました、理沙先輩、努先輩。兄さんが私のことを何て言っていたのか気になりますけど。」

「事実しか言ってないぜ？それより心、あっちの子を紹介してくれないか？」

言いながら目線で一心の隣にいる子を指す。

「あ！そうでした。棗ちゃ～ん、こっちこっち。この子が姫咲　棗ちゃん。私達と同じ班になる子だよ。」

っと急に自分の名前を呼ばれて慌てて駆け寄って来た棗ちゃんに抱きつきながら、心は紹介した。

「えっと、えっと。姫咲　棗です。響先輩のお話は心ちゃんから聞いてます。これからよろしくお願いします。」

っと礼儀正しくお辞儀をしながら自己紹介した。

「うん、こちらこそよろしく。棗ちゃん・・でいいかな？これからも妹と仲良くしてね。」

「あ、はい。もちろん・・・」

響の顔を見て、突然言葉を止める棗。

「どうしたの棗ちゃん？」

響が問いかける。

「あ、えっと、失礼ですけど先輩？今まで何処かでお会いしましたか？」

「？いや、たぶん初対面だと思うけど？」

棗の疑問に響は答える。

「そうですよね、すみませんでした。昔お世話になった人にちょっと雰囲気が似てる気がしたもので・・・」
そう言って頭を下げる棗。

「いいって、いいって。気にすんな」
と言う響だが、尚も棗は頭を下げる。

「棗、あんた相変わらず堅苦しいわね。」

「でも理沙ちゃん。失礼なこと聞いたのは私だし・・・」
理沙に声をかけられ俯いてしまう棗。

「2人は結構仲が良いんだね？それと棗ちゃん。俺は全然気にしてないし、言葉使いとかもあまり気にしないからいいよ？」

「ええ、私たちは家が近所っていうこともあって幼馴染なのよ。響もこう言ってるし、もうちょっと肩の力抜きなさい。」
響の疑問に答えながら棗に言う。

「うう、わかりました。」
っと言いながら結局敬語の棗。「そういうところが・・・」などと響の隣でぶつぶつと理沙が言っている。

「どれ、一通り自己紹介も済んだようだの。そろそろ本題に入るぞ？」
タイミングを見計らって声をかけてきた学園長にしたがい、響たち5人は整列した。
ちなみに響達と学園長が義理とはいえ親子の関係であることは秘密になっている。

「今日この訓練場に集まってもらったのには訳があっての。今日から班を組むお前らはまだ互いの実力を知らんからの。その確認を含めて模擬戦を行おうと思う。」

「よっしゃ～。久々にバトルができるぜ～。燃えてきた～。」
学園長の言葉に努のテンションが上がっていく。

「うむ。資料によると、響が魔導士ランクAで近距離戦が得意。心も魔導士ランクはAで中遠距離戦が得意。真田が魔導士ランクAで近距離戦が得意。黒沢が魔導士ランクAAで中遠距離戦が得意。姫咲が魔導士ランクAで遠距離・広域殲滅・サポートが得意。違いはないかの？」
その確認に5人は「はい」っと返事を返す。

「お前、魔導士ランクAAもあるんだな。」
響が努に対し疑問投げかける。それに対し努は

「へっへーン、どうだ？少しは見直したか？響」
っと自慢げに胸を張る。

「こいつはただの体力馬鹿なだけよ、響」
っと理沙が横から返答し「なるほど」っと納得する響。心と棗は苦笑している。

「なんだと！？なら模擬戦で俺の実力を見せたるぜ」
っと気合を入れる努。
ちなみに魔導協会で活動している魔導士の平均ランクはＢ～Ａであり、高校生でＡやらＡＡランクの理沙や努、棗は魔導士全体の中でもかなり優秀な部類に入る。まぁ、響や心は別格だが・・・
「模擬戦の相手じゃが、まずは心と黒沢。次に響と真田という順で行う。流石に姫咲に１対１で模擬戦は無理じゃろ。姫咲は模擬戦後の治癒などで力を見せなさい。それでは１５分後に始めるぞ。」
その言葉に返事をし一同は模擬戦の準備をする。

「なぁなぁ、心ちゃんはどんな魔導媒体を使うんだ？」
準備体操をしながら努が響に声をかける。
「心は扇型の魔導媒体だな。得意な属性は風だ。風を起こして攻撃したり、扇に風を纏って近距離戦闘もこなすぞ。」
響は答える。
「兄さん！？何で対戦相手にそんな情報を与えるんですか！努先輩！先輩のも教えてくださいよ！」

響の答えに心がツッコム。

「どうせすぐに分かることだろ、心？」「そうだぜ心ちゃん」
響と努は結託して心をからかう。

「む～～～、そうですか、いいですよ～だ」
頬を膨らませながら拗ねる心。その姿を見た努が（う、可愛い）などと思ったのは別の話である。

「ちなみに俺は刀を使う。得意属性は雷だな。」

「「え！？」」
そう言う響に反応する声が２つあった。理沙と棗である。

「あら、響？そんなこと私の前で言っちゃっていいのかしら？」
理沙が聞き返す。

「ああ、ちょうどいいハンデになるんじゃないか？」
とニヤニヤした響が返すと理沙は「なぁぁ！？」っと顔を赤くして眼を見開いた。

「いい度胸してんじゃなぁい、響？教えたことを後から後悔しても遅いわよ？」
こめかみをピクピクさせながら理沙が言う。

「できるものならやってみろよ」
その言葉に火が点いたのか、理沙は「フンッ」っとそっぽを向き入念にストレッチをしだした。

それらの騒動を聞きながら棗は響のさっきの言葉を思い返していた。
『ちなみに俺は刀を使う。得意属性は雷だな』
棗は考える。５年前、妖魔に襲われていた自分と理沙を助けた七聖「獄炎」と一緒にいた男の子を。
（確かあの子も刀を使って、雷を放っていたよね？）
同じ条件に当てはまる人が世界に何人いるのか、そんなこと棗には分からないが、それでも考えずにはいられなかった。
（今日初めて会った時も、なんか初対面って感じがしなかったし・・・）
そんなことを考えていると突然後ろから衝撃が来た。
「キャ！」
「棗ちゃん？どうしたの？」
心が後ろから棗に抱きつき問う。
「心ちゃん！？どうしたの？」
「あ！もうすぐ始めるってさ、行こ？棗ちゃん」
そう言いながら棗は心に引っ張られ、思考を停止した。

その後
訓練場の中の少し高くなっているリングの上には心と努が2人で立っていた。
藤歌学園にはこういった訓練場がいくつも設置されている。流石は日本最大の魔導士育成機関だ。授業などで使うこともあるらしい。

「模擬戦のルールは、どちらかが敗北を認めるか場外に出た時点とする。もちろん武器は非殺傷での。」
一心の説明に返事をした二人はお互いに戦闘態勢をとる。

「行くぞ！「ガリウス」！」
努が右耳のピアスに手をかざしながら言うと、一瞬ピアスが輝き、その手には銃身が３０センチ程になるリボルバー式の銃が握られていた。

「銃型の魔導媒体ですか。珍しいですね。吹き荒れろ「仙奈」」
心がポケットから出した扇を開きながら言うと、その扇が輝き、心の体を隠すようにその大きさを増した。

「でかい扇だな、心ちゃん。手加減はしないけど、いいよな？」

「望むところです」
努の問いかけに返事を返した心。

「準備はいいかの？それでは・・・開始！！」
一心の声が訓練場に響いた。

開始の合図と共にまず動いたのは努である。
努はガリオスを心に向けトリガーを2回引き、自らは距離を取るように後ろへと跳躍する。
一瞬で展開された魔力弾が心に向かっていく。

一方心は努のその行動を見て瞬時に開いていた仙奈を折りたたみ、身体強化の術式を展開、魔力弾を回避する。
「っ！」
っと同時に前方で展開される大きな魔力反応に気付いて目を向ける。
そこには距離をとった努がガリオスに魔力を溜め、トリガーを引こうとしていた。

それを確認した心は仙奈を開き自分の体の前に展開させ防御の術式を展開する。

「くらえっ」
その言葉と同時にトリガーを引き、ガリオスの銃口から砲撃魔法が展開された。
その砲撃は一直線に心に向かっていき、着弾と同時に大きく煙を発ててその姿を飲み込んだ。

「努も意外とやるな。きちんと銃型魔導媒体の特性を活かして戦術を立ててるみたいだな。」
場外で見学していた響は率直に感想を漏らした。

銃型魔導媒体は特徴として魔力を媒体に集めるだけで自動で射撃魔法へと変換し、トリガーを引けば射出してくれることだ。。
そのため術者は身体強化や防御といった他の術式に集中できる。さらに連射もできるので、手数を多くできるし、流す魔力量によって先ほどのように砲撃もできる。
その代わり、流された魔力を勝手に射撃魔法へと変換するため応用がきかないとといった欠点がある。

「ただ単にあいつが馬鹿なだけよ。魔力はあるのに術式を組み上げるのが苦手で、だから楽のできる銃型を選んだの。」
その説明にまたも「なるほど」っと納得する響。やはり彼が馬鹿であることは最早否定できないらしい。

「心ちゃん大丈夫でしょうか？」
心配そうに響に声をかける棗。

「大丈夫だよ、棗ちゃん。心はあのくらいじゃやられない」
そう言ってリングに視線を向ける響。その眼からは心に対する信頼が読み取れた。
ちょうどその時、リングの上でも変化が起こり始めていた。

努は煙の巻き起こる着弾地点を警戒しながら見ていた。

ゴウッ

突如その中央の煙が音を立てて周囲に霧散した。
そこには体に風を纏った心が無傷で立っていた。
「マジかよ！？」っと努が声をあげる。

「今度はこちらから行きますよ、努先輩。」
微笑みながら声をかける心。

「やっぱ、そうこなくっちゃな」
っと嬉しそうに顔を輝かせる努

「行きます」
そう言いながら開いていた扇をそのまま自分の右側へと振りかぶり、左へと振りぬく。
それと同時に扇の先端に１０個の魔法陣が浮かび上がり術式を展開する。
「エアスラッシュ！」

展開された魔法陣から放たれた１０の刃は様々な軌道をたどって努に向かっていく

「ふっ」
それを努はさっきとは逆に前へと出る。
自分に命中する風の刃を的確にガリオスの魔力弾で相殺しながら距離を詰める。

「流石ですね。なら、これならどうですか？」
それを見た心は開いたままの扇を頭上へと持ち上げそれを地面に向かって扇(あお)ぐ。
地面に一瞬魔法陣が浮かび、その先の地面の砂が巻き上がり風と共に努へと襲いかかる。
前方広範囲への風と砂の魔法、「サンドウイング」である。
「ちぃっ」
それを見た努は跳躍し回避、着地後そのままの勢いで心に向かっていく。
そして今度は左耳のピアスに手をかざしながら叫ぶ。
「来い！カリム！」
その瞬間彼の左手には逆手持ちに短剣が握られていた。
そしてそのまま心へと切りかかろうとして
「なにっ」
突然努の足もとに魔法陣が現れ、そこから伸びたロープのようなもので縛られていく。
「設置トラップ型の拘束魔法「トラップバインド」です。煙の中にいる時に周辺に仕掛けさせてもらいました。」
手に持った仙奈を折りたたみその周りを薄い風の刃で覆い努の首に突き付ける。

「私の勝ちですね♪努先輩」
笑顔で言う心

「そこまでじゃ！！勝者、心！」
一心が試合の決着を告げる。

試合後、拘束魔法を解除してもらった努は
「俺が格闘戦に来ることを読んでたのか？」
と疑問を口にした。

「はい。銃型の魔導媒体は応用が利きませんから。もう一つ魔導媒体を持っている可能性を考えました。そして持つのなら、銃の弱点を補うために近距離戦闘用の魔導媒体かと思いまして、エアスラッシュを前方に回避させるように放って格闘戦を誘ったんです」
っと心が説明する。

「なるほど、まんまとはめられたわけだ。やれやれ、俺の完敗だな。強いな、心ちゃんは。」

「いえいえ、努先輩も強かったですよ。またお相手お願いします。」
と笑顔で答える。

その答えに「お、おう！」とどこか照れながら答え、努と心はリングを降りて行った。

模擬戦第一試合、心ＶＳ努

結果・・・心の勝利

第3話：模擬戦　心ＶＳ努（後書き）

心ＶＳ努はどうだったでしょうか？

まえがきでも書いたように、バトルが入る小説を書くのは初めてなので、しっかりと描写できていたか不安です。

アドバイスや評価、感想などお待ちしてます。

第４話：模擬戦　響ＶＳ理沙（前書き）

お待たせしました。
模擬戦の続き、響ＶＳ理沙です。
やっと響の戦いを書けました。

第４話：模擬戦　響ＶＳ理沙

「結局負けちまったな？努。」

「ぐぬぅっ」

模擬戦を終えて見学席へと帰ってきた努に響は声をかけた。

「「模擬戦で俺の実力を見せたるぜ」とか言ってなかったっけ？」

ニヤニヤしながら努のものまねをする響

「兄さん、もうその辺にして・・・ってああ！努先輩！？」

注意しようとした心はしかし、途中で黒いオーラを纏って隅に行きのの字を書く努を見て中断する。

「いいんだ、いいんだ。俺はどうせ体力しか取り柄がない馬鹿だから・・・」

「そんなことないですよ、努先輩！努先輩だって・・・・」

「さてと、次は俺らの番だぜ、理沙！」

落ち込む努とそれを必至に励ます心を見て満足したのか、響はその場を放置して理沙へと話しかける。

「あんた、ほんとにいい性格してるわね？」

少し頬を引きつりながら響に声をかける

「だろ？よく言われるぜ！人生楽しむのが一番」

ビシッっと親指を立てながら満面の笑顔を浮かべる響。棗は苦笑す

るしかできない。
理沙は「だめだこりゃ・・・」と頭を抱えている。
彼女がこの班一の苦労人かもしれない。

「そんじゃいっちょ行くか！！」

「頑張ってくださいね。響先輩」
と声をかける棗に対し、
「おうっ！」と言いながら右手をあげて見学席を出ていく響。その後を若干疲れた顔の理沙が付いて行った。

「棗ちゃん？どうだった？私の試合。」
一通り努の説得を終えた心が棗に声をかけたのは2人が出て行ってすぐのことだった。

「お疲れ様、心ちゃん。試合すごかったよ。心ちゃんって強いんだね。」

「いや～、それほどでも」
照れながら率直な感想を言った棗に返す。

「謙遜するこたねぇぜ、心ちゃん。何といっても俺に勝ったんだからな！！」
復活した努が心に声をかける。回復が早いやつである。

「努さんもお疲れ様です。ケガしてませんか？」
「大丈夫だ。精神はズタボロだが、体は無傷だ」
ケガの有無を尋ねた棗に、そう言って返す努。
「そ、そうですか。ケガがなくてよかったです。」
と苦笑交じりで答えた。
「あ！兄さんたちが出てきたよ。」
心が言うと、努は「どれどれ」っと体を前に出して見る。
「心ちゃん。やっぱり響先輩も強いんですか？」
棗は心に聞いた
「そりゃ強いよ！私は何回やっても勝てる気がしないかな。」
「でもよ、魔導士ランクは同じなんだろ？」
棗の質問に答えた心に努が聞く
「たいていは、魔導士ランクが同じならそんなに勝率に差は出てこないと思うんだが。相性の問題か？。」
通常、魔導士のランクは個人の強さだけを示すのではなく、魔法の発動速度、規模、魔力量など様々な能力を総合してランクにしている。上位のランクになると指揮能力といったものも加わってくる。そのため、戦闘になると魔法の連携や相性によって低ランクの魔導士が高ランクの魔導士を倒すというのは結構有り得ることである。その点で、努の疑問は響の正体を知らない者にとって当然の疑問であり、棗も同じことを思っていた。

それに対して心の返答は、
「いいえ、兄さんと私とでは「経験」がまるっきし違います。私がどんな手を使ったとしても兄さんはそれに対応して打開してしまいますから。」
といったものであった。

当然努と棗の頭の中は、
（？？？？）
と混乱している。

「心ちゃん、それってどういう「あ！始まるみたいだよ。」・・・」
棗がそのことを聞こうと思ったとき、心の言葉に遮られタイミングを失った。

納得していない2人はしょうがなく視線をリングに向けるのであった。

リングにはそんなやり取りとは関係なしに、2人が立っている。

「さて理沙。お前の実力を見せてもらおうか？」
響は偉そうに言う。

「それはこっちのセリフよ、響！そんなに偉そうにしてて負けたら恥ずかしいわよ？」
と挑発には乗らない理沙だったが、
「安心しろ理沙、俺は負けないからそれだけは有り得ない。」
と即答する響を見て、あえなく失敗する
「ムカァ。そんなに自身があるなら響、賭けをしましょうか？」
と提案した。
「ああ、かまわんよ。それじゃ勝った方が負けた方に1つ命令できるっていうのはどうだ？」
これまた即答で返す響。
「いいわよ、乗った。拒否権はなしね。絶対あんたに吠え面かかしてやるんだから」
「あえて言おう、『それは不可能である』と」
ブチィっと何かが切れる音がしたような気がする。
「そろそろいいかの？2人とも」
そこに一心が若干冷や汗をかきつつ声をかける
「はい、こちらは準備完了です」
涼しげに響は答える。
「望むところよ」
気合い十分にこたえる理沙。背後に修羅が見えるのは気のせいだろ

う。

響は右手を前に出し、理沙は胸の前で左手の甲に右の掌を合わせる。
そして同時に自らの相棒の名を呼ぶ

「奔(はし)れ、『柳(やなぎ)』！」「猛(たけ)れ、『竜麟(りゅうりん)』！」

右手の指輪からまたは、両手のブレスレットがそれぞれ輝く。
治まったときには、右手に鞘に入った刀を持った響と、両手を赤と黒の手甲で覆った理沙が立っている。

鞘に入った右手の刀を左手に持ち替え、右手で柄を握り刀を抜く。
その刀身は澄みわたった色をしており、手入れがいきとどいていることがうかがえる。
だがしかし、理沙の魔導媒体を見た響は背中に悪寒を感じていた。
彼の師であり姉である七聖「獄炎」は手甲の使い手であり、幼いころから修行という名の調教を受けていた響は本能的に一瞬その光景を思い出してしまった。
くしくもその時、見学席にいた心もまた過去を思い出し身震いして棗に心配されていたが、そんなこと響が気づいているわけがない。

「両者、準備はいいみたいだな？」
一心のその声で平静さを取り戻した響は「はい」と返事をし、理沙もまたそれに続いた。

「うむ。それではこれより模擬戦を始める。・・・開始！！」

その言葉を合図に二人は同時に動き出した。

開始の合図とともに二人は距離を詰める。

「はぁっ！」

「ふっ」

理沙は自分の顔の脇から少し下へと叩きつけるように右手を振るう。
対する響は下段に構えた刀を左足を踏み込むと同時に振り上げる。

ギィィィン

お互いの攻撃は一瞬拮抗するも、上から叩きつけたからだろう、理沙が押し勝った。

反動で後退する響を追うように、右手を振った勢いをそのままに右足を軸に回し蹴りを放つ。

それを見切って回避した響は、回避しながら右手の刀を逆手に持ちかえる。
そして、足首、膝、足の付け根、腰、肩、肘、手首の順に体の関節を目一杯使って回転エネルギーを刀に乗せ、理沙へと放つ

「如月流刀術（きさらぎりゅうとうじゅつ）　流円閃（りゅうえんせん）」）

それに気づいた理沙はとっさに両腕を交差させ、防御する。

ズガンッ

およそ刀での攻撃とは思えない音を立て、理沙の手甲に当たった斬撃は、そのまま理沙の体を１０ｍほど後退させて効力を失った。

「・・・いっつ～～、なんつう威力の攻撃よ！今の音ってどう考えても刀じゃ出ないでしょうが」

両手を振りながら響を睨む。

「如月流刀術　流円閃。全身の関節を円のように流れるように順序良く回転させて、すべての運動エネルギーを刀に乗せる技だ。今のでケリをつけるつもりだったんだがな」

その言葉にカチンときた理沙は

「ああ！もういいわよ！出し惜しみは一切なし。全力で叩き潰す！」

と、魔力を両手へと集中する。すると

ゴウッ

っと音を立てて手甲「竜麟」炎が上がる。

（オイオイ、炎まで姉さんとおなじかよ・・・）

と内心結構参っている響。

「ふぅ～、しょうがない。」
響は体全体に魔力を纏う。

バチッ　バチッ

すると体がかすかに帯電する。

それを今度は「柳」に集め、帯電させる。
「柳」は小さな稲妻を迸(ほとばし)らせながら白く輝いていく。
『白雷(びゃくらい)』
響の固有術式であり、圧縮された雷が白く輝く様から名づけられた。
体や刀などに纏わせることができる。また響が使う雷系統の魔法は白雷がすべて基になる。

「それがあんたの本気？」

「さぁな？」
理沙の問いに笑いながら答える。

「フンッ、まぁいいわ。やることに変化はないし。覚悟はいいわね？」

「ご自由っに！！」
そう言いながら柳を振るう。

そこから魔法陣が展開され、白い稲妻が発生し理沙を襲う。
初級魔法である「ライトニング」である。

「っ！？」

瞬時に理沙は攻撃の性質を見切り防御壁を展開し防ぐ。
「咄嗟に防御壁を展開したのは正解だな。さっきと同じように手甲で防いでたら感電していた。」
理沙の行動を褒める響
まるで稽古をつけているような響の物言いと不意打ちにイラつきながら
「っ相変わらず、いい性格っね！！」
そう言いながら頭上に両手を掲げ、炎を収束、それを響に向って放つ。
「フレイムウェーブ」
解放された炎が波になって響に迫る
それを響は左手を前に出し防御壁を展開し防ぐがそこで気づく
（やるな！？目くらましか！）
押し寄せた炎に周りを囲まれ、視界が遮られる
突然左後方の炎が動くと
「バーンフィスト！！」
そこから理沙が現れ、紅蓮の拳を突き出す
ガキィィィン
だがそこは場数を踏んでいる響だけあって空気の流れを読み、それを察知し白雷を纏った柳でそれを受け止る
「器用なことを・・・」
拳に魔力の膜をかぶせ、感電を防いだ理沙を称賛する

余裕そうな表情の響を見て、なおも理沙は
「もらったーー」
と自身の切り札である、右手と同じ術式を展開する左拳を突き出す
（術式の同時展開！？高校生の技術じゃねぇだろ）
珍しく驚いた顔の響きを見て理沙は内心で勝利を確信するが、
「っ！？」
突然右手とせめぎ合っていたはずの力が消失した
見ると目の前には「柳」だけが存在する
「忠告だ。勝利を確信しても油断はするな。それが隙になる。」
「！？しまっ」
自分の懐近くから聞こえてきた声につられ、理沙は咄嗟に距離を取ろうとするが、すでに遅い
「それから、刀を持ってるからといって刀で攻撃するとは限らん」
そう言いながら自身の右手に白雷を集中させ理沙の鳩尾あたりに掌を当てる
ズガンッ
瞬間、理沙の体を白雷が通り抜け背中から抜けて行った
「嵐山流格闘術一の型　浸透頸（しんとうけい）の変化　白雷掌（びゃくらいしょう）」
浸透頸とは魔力を使い打撃点を基点とし体内部へ攻撃する技で、白雷掌はそれを白雷で行った響のオリジナル技である

理沙は薄れていく意識の中で
「術式の同時展開は焦ったが、最後の詰めが甘かったな」
という言葉を聞き、

（最後まで偉そうに・・・）
と思いながら意識を手放した。

突然響と理沙を囲んでいた炎がなくなりその中から理沙をお姫様抱っこした響が姿を現した。

見学席では
「なんだ？いったいどうなってたんだぁ～～～！？」
と言う努の叫びが聞こえてくるが、気にしない。

「それまで！　勝者、響！！」
その光景を見た一心が試合の結果を告げ、模擬戦は幕を閉じた。

模擬戦第二試合　響ＶＳ理沙
勝者　響

第４話：模擬戦　響ＶＳ理沙（後書き）

どうだったでしょうか？

戦いの描写など、変なところがあった時は連絡ください。

感想なども待っています。

第5話：結成

「う～～ん」

試合後理沙はすぐにその意識を覚醒させた。
ぼやけた視界であたりを見回す。

まず最初に目に飛び込んできたのは空。少し赤くなった空に、ところどころ雲が浮かんでいる。きっと夕方なのだろう。
次に視線を横に向ける。そこにはいつもの訓練場の景色が広がっており、見学席のほうから努、棗、心の順で駆け寄ってくるのが確認できた。

「っ！？」
っとそこまで確認して理沙は自分が模擬戦で響に負けたことを思い出した。

「お？目ぇ覚めたか？」
急に自分のそばから声が聞こえ慌ててそちらを確認する理沙。視界一杯に響の顔が写りこむ

「きゃぁっ！？」
「危ねえな？落としちまうだろ。」
飛びのこうとして身をよじった理沙に対し響は抗議の声をあげた。

そこで初めて理沙は自分の状態について考える
（落としちまう？何を？私を。どうして？かかえてるから。）
自問自答を終えた理沙は一つの現実に直面する。

そう、お姫様抱っこと言う現実に
ボンッっと音を立てて瞬間沸騰した理沙は
「ちょっと!?なんて格好させてるのよ!早くおろして」
とジタバタする
「ちょっ、お前。暴れんな!ホントに落とす・・イテテテテッ」
そう言って響は頬をつねられながらも理沙を降ろすことに成功した。
「ぅう、どうしてあんたがお姫様抱っこなんてしてるのよ、バカ!!」
「ここにそのまま寝かせとく訳にもいかんだろうが」
赤くなった頬を隠しながら悪態をつく理沙に響は言った。
そこに駆けつけてきた努が
「お〜い大丈夫か?ん?理沙どうした?顔が真っ赤だぞ?」
と理沙を心配するが
「んなぁ!?別に赤くなってなんかないわよ!気のせいじゃない?」
っとまたもそっぽを向く理沙
「そうかぁ?ならいいけどよ」などと納得した努
「理紗ちゃん?ケガはないですか?」
遅れて駆け付けた棗が問う
「ええ、大丈夫よ棗。まだちょっと体が痺れてるくらいだから」

「よかったぁ。でも念のため回復魔法かけときますね。来て、シルヴィス！」
棗が声をかけると髪に付けていた鳥の羽の髪飾りが光る。
光がおさまると、先端に水晶のようなものが付いており、その周りを羽のようなもので囲った杖が出現する。
「彼のものに癒しの恵みを与えん！ヒールライト」
短い詠唱を終え、杖の先端に魔法陣が展開、そこからやさしい光が漏れ、それを理沙に当てる。
３０秒程その光に当たった理沙は「ありがとう、棗。もう大丈夫よ」と言って、立ち上がった。
「全く。女の子相手なんですから、少しは手加減して下さいよ、兄さん。」
「いやいや。目の前に炎を撒き散らしながら殴りかかってくる奴に手加減なんてできんだろ。まぁ何にせよ、賭けは俺の勝ちだな？理沙」
咎める心に答えて響は理沙に言った。
「くっ！好きにすればいいじゃない！！」
「じゃあ、とりあえず保留で。ま、そのうち何かお願いするとしよう」
そんなことを言う響だが、当事者の理沙にしてみればたまったものではない。
いつ何を命令されるのか、その時のことを考え不安で顔を青くする。
無論響は、そんな理沙の反応を計算ずくでそんなことを言ったのだ

が・・

「とりあえず、お互いの実力はわかったかの？」
っと傍観していた一心が声をかける。その声に「はい」と答え一同は再び整列した。

「これからはこの班で活動してもらうことになる。皆仲良くするように。」
一心の問いに了解の返事を返す響たち

「さて、そろそろ疑問に思ってる者もいると思うが、何故今回このように我が学園の実力者を一つの班にまとめたのかを説明する」
その言葉に少し息を飲む５人

「お前たちは最近世界のいろんなところで妖魔の出現率が高くなっていることは知っておるかの？」
５人はうなずく

「そこで今回、我が学園はお前たちに学園の防衛を頼みたいと思う。」

「え！？妖魔からの学園の防衛ですか！？それは魔導教会や先生方の仕事で学生レベルの依頼じゃないですよ？」
一心の言葉に理沙が声をあげた

「うむ、本来はそうじゃ。しかし、妖魔の発生件数の増加や魔導犯罪の対応で魔導教会は人手不足なのが現状なのじゃ。妖魔発生の報せを出しても魔導士が派遣されるまで３０分はかかる。それでは被害が拡がる一方でな。もちろん各先生方も対応はするが、それでも

人出不足には変わりない。」
「なるほど、一般の学生には妖魔との戦闘は辛い。そこで俺達が選ばれたと言う訳ですか」
一心の言葉に響が言う
「そうじゃ。無論無理はしなくて良い。魔導教会の魔導士が来るまでの時間稼ぎと考えてくれればそれでいい。報酬もでるしの。どうじゃ？やってくれるかの？」
「わかりました。俺でいいのなら引き受けます。」
「私も兄さんと同じで力になります」
一心の問いに即答する神楽坂兄弟。
「後の3人はどうじゃ？」
その言葉に互いの顔を見る3人。そして一斉に頷き
「わかりました。俺は引き受けます」
「私もよ。この力が誰かの助けになるのなら」
「あの、私も及ばずながらお手伝いさせていただきます」
と承諾した。
「そうか、すまんの、危険な依頼をして。学園もお前さんらをサポートするからの。風紀委員の仕事もこなしながらだときついとは思うが、頼んだぞ」
「「はい」」
返事をする5人
「うむ、いい返事じゃ。それでは今日はこれで解散とする。各自疲

れをとって明日からの活動に備えておくように。」
そう言って一心は訓練場を後にした。

「しっかし、なんか大事になってきたな。」
学園からの帰り道に努が切り出した。

「そうですね。こんな話になるなんて思ってもみませんでした。本当に私達で大丈夫でしょうか？」
努の言葉に棗が返す。

「大丈夫だよ、棗ちゃん。それに決まったことは仕方がないし、前向きに行こうぜ」
響が言う。

「はぁ、それもそうね。あんたを見てると本当になんとかなるような気がするわ。」
理沙の言葉に「だろ？」っと笑顔で返す響。

「ま、今更慌ててもしょうがないし、家に帰って風呂入って飯食ってさっさと寝るか！そうゆう訳で響、心ちゃん。明日からもよろしくな。じゃ、俺は先に帰るわ！」
そう言って手をあげ走って去っていく努。

「あはは、努さんらしいですね。」
「そうね。それじゃ棗。私たちも帰りましょう。響に心ちゃん、また明日学園で。」
「お先に失礼します」
そう言って去っていく理沙を、こちらに頭を一度下げてから棗が追って行った。

「おう、また明日な！」
響が答える。その隣では心が棗に手を振っていた。

「皆良い方たちでよかったですね、兄さん」
二人きりの帰路の途中で心が言った。

「ああ、そうだな。俺達は何としてでもあの笑顔を守らなくちゃな。」
改めて今回の任務に対する決意をする響

「そうですね。私と兄さんならできますよ。きっと。」
その兄を微笑みながら見て、心は言う。

「それはそうと兄さん。さっきの模擬戦。最後ちょっとだけ本気をだしましたね？」

「お前、見えてたのか？」

心の言葉に軽く驚く響

「風のあるところで私の眼を誤魔化せると思いましたか？リミッターを付けているとはいえ、目の前の出来事くらい把握できます。」

「そうだったな。ちょっと予想以上に強かったからな。あいつらいい魔導士になるぜ。きっとまだまだ強くなる。」

「フフ、守らなきゃいけない理由が一つ増えましたね？兄さん」

「ああ。それじゃさっさと家に帰って飯にするか！今日は何が食いたい？」

「そうですね～、グラタンなんてどうですか？」

「まかせろ！じゃあ、まずは材料の調達からだな。買い物くらい手伝えよ」

「わかってますよ。ささ、行きましょう」

そう言いながら響の腕を引っ張っていく心。その顔もまた笑顔だった。

（お前の笑顔も守らなきゃな）

などと考えながら響はついて行った。

「ねぇ、理沙ちゃん？」

「なに？棗」

響たちと別れて帰宅していた理沙と棗。
その途中に棗が理沙に尋ねる。

「響先輩のことなんだけど。５年前の男の子に似てないかな？」
５年前、それはこの２人にとってあまり思い出したくない過去であり、いまここにいる自分たちを形作った出来事である。

「響が？確かに刀と雷を使ってたけど、もしあの子だったら今の私たちとは比べ物にならないほど強いわよ？確かに響も強かったけど・・・」
今日の模擬戦を思い出し、若干悔しそうにしつつも響と５年前の男の子を比べる

「やっぱり人違いじゃないかな？」
考えた末に結論を出す。

「そうかなぁ？今日初めて会った時、初対面って感じがしなかったんだよね」
なおも食い下がる棗。

「そう？う～～～ん・・・」
棗がここまで言うのも珍しいなと思いながら理沙は思い返した。

あの5年前の辺り一面が真っ赤に染まった世界のことを・・・

第5話：結成（後書き）

どうでしたでしょうか？

次回は、理沙と棗の過去を書くつもりです。

楽しみにしていてください。

第６話：五年前の決意（前書き）

今回は理沙と夏目の過去のお話です。

自分的にグロテスクな表現を使ってますので、ご注意ください。

第6話：五年前の決意

5年前・・・

私と親友の棗は夏休みに少し離れた親の実家に泊まりに来ていた。
棗は小さいころから一緒だと言うこともあり、実家へは何度か泊まり込みで遊びに来たこともあった。

その日はとてもよく晴れた日だった。雲ひとつない空、照りつける太陽光。辺りには蝉の鳴き声も響いている。

「「行ってきま～す」」
そんな中私と棗は30分ほど離れた場所にあるプールへと遊びに出かけた。

「気を付けて行ってきなさい」
そんな声を聞きながら、私と棗は水着の入ったバックを自転車の籠に入れて乗り、ペダルを漕いで実家を後にした。

プールへは問題なく着いた。
この暑さだからだろう、プールにはすごい人混みができていた。

「すごく混んでるね、理沙ちゃん」

「そうだね、棗」
そんな会話をしながら受付で入場の手続きを済ませる。
プールには男女のカップルから私達と同じ年頃の子供達まで様々な年層の人がいた。

水着に着替えた私たちはまず、このプールの一番人気である流れるプールへと向かう。
川のような水路が円状になっており、その中を水が一定の方向に流れているものである。

「わぁ～、冷たくて気持ちいいっ」
棗が水に入り感想を言う。
今までこの暑さの中で３０分自転車を漕いできたので、体はすっかり火照っている。棗の反応は当然だろう。
私も同じように感じた。

「さ、いこ。棗。」
「うんっ！」
私たちは水の流れに身を任せて泳いでいく。
途中途中、混雑のせいでほかの人にぶつかりそうになるが、避けながら泳ぐ。
時には流れに逆らい、時には泳ぐのをやめて水の上に浮かんだりしながら私たちはそのプールを満喫する。

ある程度楽しんだ私たちは、そのプールを後にし他のプールへと行

った。
海のように波打つプールや、下から噴水のように湧き出るプールなど手当たり次第に遊んでは満足していく。
ウォータースライダーには身長制限で滑れなかったのが心残りだった。
その他にも、実家を出る時にもらったお小遣いでアイスクリームを買って、二人で食べ比べなどをした。

それは突然の出来事だった

現在の時刻は午後3時
まだ外は明るいが、一通り遊んでプールを満喫した私たちは「そろそろ帰ろうか」などどプールサイドに座りながら話していた。
水中での運動は結構体力を使うため2人はもうヘトヘトである。

「そうだね。少し早いけど帰ろ！理沙ちゃん」
棗がそう言って立ち上がった。
その瞬間

ブォン

っと音を立てて世界が変わる。
夕焼け以上に空が赤い世界に。
周囲では大人が「なんだ、どうした！？」「これは・・結界か！？」

などと言う声が聞こえてくる。

「理紗ちゃん・・・」

「棗、私のそばを離れないでね」

心配そうな棗の手を握りながら私はは言った

その時

「妖魔だ！！妖魔がでたぞーー！！」

と言う叫びが聞こえる

見ると、魔法陣の上に5メートル位の身長で、全身黒で目が赤く、鋭く発達した爪に尻尾を持った異形の生物がいた。

「グゥゥゥゥォォォオオオ！！」

その異形が咆哮をあげると大気が震える。

「クソッ！！」

何人かの男の人がそこに魔法をあびせ、1人の大剣を持った男が切りかかる。

おそらく休暇中の魔導教会の者だろう。

「もらったーー！！、な！？」

その瞬間横からの衝撃により男が吹き飛ぶ。そのまま男はプールへと落下し動かなくなった。

「なに！？一匹じゃなかったのか？」

そこには同じ異形がいた。

「こっちにも出たぞ～～」「こっちもだ！！逃げろー」

それを合図にあちこちで声が上がる。
プールに来ていた客が一斉に逃げ始める。

「棗、私たちも逃げるよ！」
「う、うん！！」
その光景を見て若干呆然としていた私と棗は正気を取り戻し、私は棗の手を引いて逃げ出す。
とりあえず何も考えずにプールの出口へと向かっていく。

しかし・・・

「なんだよ、これ！！見えない壁があるぞ！？」

プールの出口には結界のせいで出るに出られない客で混雑していた。

その周辺にさっきの魔法陣が展開され
「グゥゥゥゥゥゥォォォォォォ！！」
妖魔が出現した

「うわぁ～、逃げろ」「押すんじゃねぇ」
そんな叫びが出る集団の中に何体かの妖魔が飛び込む

あるものはその大きい体に押しつぶされ、あるものは爪で切り裂かれ、あるものは尻尾で弾き飛ばされる。

その光景を見た私は泣きそうになりながらも気を保ち
「棗、こっち！！」
と棗の手を引き逃げる

「理沙ちゃん、私もう走れないよ・・・」
棗が言う。
1日プールで遊んだ後である。かなりの疲労が溜まっているのだろう。

「分かった。あの草陰に隠れよう」
そう言って飛び込んだのは人2人をなんとか覆い隠せるくらいの草陰である。

「理沙ちゃん、これからどうするの・・・」
「しっ！絶対声を出しちゃだめよ。泣き声も！」
泣きそうな声で尋ねる棗に私は言う。
棗もしきりに頷き、二人で抱き合って身を寄せる。

遠くからは人の悲鳴や妖魔の方向がしきりにあがっている。
時折近くを人や妖魔が通るが私たちには気付かずに通り過ぎる。
私たちはただ震えるしかできなかったのだ。

それからどれくらいの時間がたったのだろう。
実際には20分くらいしかたっていなかったが、私たちにはそれが永遠と言っても過言ではない時間だった。

あたりは静寂に包まれ、人の叫びも妖魔の咆哮も聞こえない。
「棗、少し外に出てみよう？」
私の声に頷くことで答える棗

そうして私たちは音をたてないようにゆっくりと外に出た。
まず目に入って来たのは、見渡す限りに広がる人だったものの残骸。
それと赤い液体。
次に目に入ったのは赤いままの空
見渡す限りの『赤』

赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤

私たちの心にはその色が深く刻まれる。

「いやぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
棗がその光景に耐えられなかったのか叫ぶ。
当たり前である。まだ幼い少女がこの光景に耐えられるはずがない。
私も棗がいなかったら耐えられなかっただろう。
そこには命がなかった。人の営みがなかった。
さっきまであんなにいたカップルも、同年代の子供も何もかも・・・

「棗、落ち着いて！！」
私は必死に棗を落ち着かせる。

その時
「グゥゥゥゥゥゥゥォォォォォォォォ！！」

棗の声を聞きつけた妖魔が3体こちらに向かってくる

「棗、逃げるよ！！」
「ダメ・・立てないよぅ」
腰を抜かしたらしい棗は、その場で座り込んで逃げられないようだ

った。

その間にも妖魔が迫ってくる

「理沙ちゃんだけでも逃げて」

「馬鹿！！そんなことできるわけないでしょ！」

棗の言葉に怒りながら、私は棗を抱えようとするが

「オオオオオオオ！！」

目の前まで迫った妖魔が右手を振り上げていた。

「っ！？」

「く！！」

咄嗟に目を瞑る棗をかばうように私は棗を抱き寄せる。

脳内には妖魔の爪で貫かれる自分たちが鮮明に想像できた。

ガキィィィィン

「「？？？」」

いつまでたっても来ない痛みと衝撃に瞑っていた目をあける。

「ギリギリセーフかな？まだ生存者がいたなんて。大丈夫？２人とも」

目の前には刀で爪を受け止めた少年が立っていた。

それを信じられないものを見る目で見る私たち。

「危ないから、そこから動かないでね。」

そう言って少年が妖魔の爪を押し返し距離を取り、その体に雷を纏い始める。

先に動いたのは少年だった、３匹のうち中央の１匹に雷撃を繰り出す。
それを浴びた妖魔は痺れて動けなくなる。
そのうちに残り２匹に向かっていく少年。それを迎え撃つ妖魔。
妖魔の攻撃を軽いものは受け止め、大きいものは回避、受け流し、
できた隙に刀で、雷で攻撃し傷を負わせていく。
２対１の不利をものともせずに少年は闘っていく。

しかし、最初に雷を浴びせて動けなくなったはずの妖魔が、動きを取り戻し後ろから少年に接近する。
「危ないっ！」
咄嗟に叫ぶが少し遅い。妖魔の爪が少年へと吸い込まれていく。

「全く。いつも言ってるだろう？動きを奪っても最後まで気を抜くんじゃないと。」
瞬間そんな声が聞こえてきて、少年の背後にいた妖魔が吹き飛んだ。
「姉さんがいたのには気づいてましたから、でも一応ありがとうございます。」
それに気づいた少年が事もなげに言い、礼を言う。
「はぁ、可愛くない弟分だねぇ。後は私にまかせな。アンタはあの子たちの護衛」
そこにいたのは赤い髪をなびかせ、両手に炎を従えた女性だった。
その女性の言葉に「分かりました」と答えた少年が私たちのそばに来る。

「もう大丈夫。もうじき助かるよ。」
そう言って自分たちの周囲に防御結界を展開する少年。
それを確認した女性が両手の神具「絶手甲陽炎」を胸の前で打ち付ける
「さぁて！！アンタ等には罰を与えないとねぇ」
そう言って彼女は全身にも炎を纏う。

赤、一瞬心にその色がよぎる。人の血、赤い空。今日起こったいやなことがすべて赤と言う色に集約される。
しかし、この日最後に見た強烈な「赤」はそんなことを一切感じさせず、ただ温かかった。生命の鼓動。それを感じさせる。きっと私たちが「赤」と言う色に対しトラウマにならなかったのは彼女のおかげだと確信できる。

2体の妖魔が同時に彼女、七聖「獄炎」に襲いかかる。それがいかに無謀なことであるかを知らずに。

「うぜぇ！！」
彼女が右手を左へと振るう。
ただそれだけ。ただそれだけで2体の妖魔が炎の中に消える。炎がなくなるとそこには何もいなかった。
すると、魔力を感じたのか奥からさらに8体の妖魔がやってくる。
「「っ！？」」
息をのむ私と棗。
「おうおう！わらわらと群がりやがって。」
そう言って右手を頭上に上げる。

「我が身に宿るは煉獄の業火　其の業火を以って穢れた魂を浄化せよ　我が前に顕現せよ　イノケンティス・ボルケーノ！！」

詠唱を終え右手に巨大な魔法陣が展開、そこから膨大な魔力が解放された。

周辺すべてを炎が覆っていく。しかし、その炎は何も燃やさなかった。木も建物も何も。しかしその炎に妖魔が触れた瞬間、その妖魔はこの世界から存在を焼き尽くされる。
それは一瞬の出来事だった。襲ってきた妖魔は跡形もなく消え、静寂が周囲に戻る。

ブォン

すると、空を覆っていた赤い結界が解け、元の青い空が戻っていく。

「チィッ、首謀者は逃がしたか。」
そう言って武装を解く女性。そして去っていく。

「すぐに魔導教会の人が保護に来ますので指示に従ってください」
そばにいた少年もそう言って女性を追って行った。

「待って下さい、あの、名前は？」
そいって私は引き止める

その言葉に立ち止まり振り返って
「魔導教会所属　七聖が一人「獄炎」だ」
「その補佐です。悪いけど、名前はお教えできません。機密事項なので」

そう言って再び去っていくその姿を、見えなくなるまで私たちは頭を下げ続けた。

その後すぐに魔導教会の魔導士が来て、私たちは保護された。
どうやらあの赤い結界が解けたおかげで、ようやく中に入れたらしい。

後から聞いた話によると、あの事件は赤い結界の中に七聖「獄炎」「斬鉄」「荊姫」の3名とその補佐が単独で侵入、妖魔のほとんどを殲滅したらしい。
しかし、目撃情報にあった妖魔を召喚した男性は確保できずに逃走、行方を眩ませたらしい。
この事件はテレビで大々的に放送された。
生存者は２０名ほどで、死者は千名以上だったとされる。

そして現在に戻る。

「やっぱり気のせいじゃない？それに、そんなに都合よくあの男の子が転校してくるわけないじゃん」

私は5年前を思い出しそう告げる。
「そうかなぁ～？」
まだ納得できないらしい棗。
「ま、考えてても分からないし、響に直接聞いてみれば？」
それが一番手っ取り早いと考え私は言った。
「え、え～。そんなことできないよぅ。」
「全く、度胸がないわね。あ～もう、ほら。考えてても仕方ないんだから、さっさと帰ろう。」
そう言ってあの時と同じように棗の手を引く。
違うのは二人が笑顔であるということだ。
「わわ！！まってよ、理沙ちゃん。」
慌てて付いてくる棗

私と棗はあの事件の後に二人で話し合った。
私達と同じような人をこれ以上増やさないために、私たちは魔導士になろうと。
あの七聖「獄炎」の女性やその補佐の少年のように、誰かを守れるようになろうと。
あの時の気持ちは今も変わらず、私たちは走り続ける。
あの人たちに追いつけるように

「ようし、こっから私の家まで競争ね。負けた方が勝った方に明日のランチ後のデザート奢ること。よ～い、ドン」

そう言って私は走り出す。

「え？ウソ！？ちょっとずるいよ、理沙ちゃ～ん」

慌てる棗を尻目に私は駆ける。

何よりも大切な、この時間を守るために・・・

第6話：五年前の決意（後書き）

どうだったでしょうか？

今回は理沙視点で書かせていただきました。
変なところとかなかったでしょうか？

次回の更新も楽しみにしていてください。

第7話：弄り者と弄られる者（前書き）

お待たせしました。

1週間で1話は更新しようと考えているのですが、なかなか上手くいきませんね。

第7話：弄り者と弄られる者

次の日の朝

響はいつものように5時に起床し活動を開始する。
今日からは朝食の他にお弁当を作らなくてはならないからだ。

「昨日は一昨日疲れてたから、日保ちするもので弁当作っといたけど、毎日そんなわけにはいかんしな」
日保ちするもので昨日のうちに弁当を作っておけば朝は楽だが、それでは栄養が偏ってしまうのである。

「まぁ、料理は楽しいし。今日は何を作ってやろうかな・・・」
そう言って冷蔵庫の中を確認し、思案する響。
近頃の下手な奥さんよりも主婦が板についてるのは気のせいではないだろう。

時刻は7時
「そろそろ心が起きてくるかな？」
そう言いながら朝食をテーブルに並べていく。
今日の朝食は、ご飯に味噌汁、鮭の塩焼きと模範的なまでの和食である。

しかし・・・
「遅いな？いつもは何も言わなくても勝手に起きてくるのに。」
待っても心が起きてこないことを疑問に思う響。

「そろそろ起きないと遅刻だな。しゃーない、起こしに行くか・・・」
そう言って響は心の部屋に向かって行った。

心の寝室前

コンコン

ノックの音が響く。
「心～？起きてるかぁ。そろそろ起きないと遅刻だぞぉ～」

「・・・・・・」
響の呼びかけにも反応がない

「珍しいな？心が寝坊なんて。入るぞ、心」
そう言い部屋のドアを開ける。

部屋の中には、いかにも女の子らしい光景が広がっていてヌイグルミなどもいくつか置いてある。
その部屋の突き当りのベッドに心は布団をかけて寝ていた。

「おい、心？起きろ～！遅刻するぞ？」
心の肩を揺すりながら言う。しかし・・・

「う～ん・・・」
起きない心。しかし鼻がピクピクなっているのを響は見て

（コイツ、もしかして・・・）

あることに思い立った響は、少し考え

「ふむ、熟睡してるな？このままでは2人とも遅刻してしまう。我が妹よ。お前の犠牲は無駄にはしない！！」

そう言って入ってきたドアに向かい、ドアを閉める。

バタンッ

その瞬間、

「え！？ちょっと待ってよ兄さん！？起きてる！起きてますってばぁ」

布団から飛び起きる心

そこには

「やっと起きたか、心」

ニヤニヤする響がいた。

「な！？兄さん！部屋から出て行ったはずじゃ・・・まさか気づいてましたね？」

驚きながらも確信する心

「お前が嘘をつくと鼻がピクピク動くんだよ」

「っ！？〜〜〜／／／」

響がそう言うと急いで鼻を押さえる心

「まぁ、起きたんなら早く飯食って学園に行くぞ」

そう言って今度こそ部屋から出ていく響

「あ！？置いていかないでくださいよ」
慌てて心は追いかけて行った。

「しかし、何で今日は狸寝入りなんてしてたんだ？」
あのあと朝食を食べて登校していた響は心に聞いた。

「いえ、たまには兄さんに起こしてもらいたいなぁっと思いまして」
そう言って心は続ける

「ほら、やっぱり憧れるじゃないですか？兄にやさしく起こされる妹ってシチュエーション！けっこう夢だったんですよ？」

「そりゃ、ご期待に添えなくて残念だ。それに普通は逆じゃないか？年下の妹に起こされる兄の構図だろ？確かにそれなら憧れるな！まぁ、お前が俺より早起きしたのは見たことないから無理だろうが」

「兄さんが早起きしすぎなんですよ！！いいですよ、じゃあ今度は私が兄さんを起こして見せます」

「お！？そっか！期待しないで待ってるとしよう。」

そんな会話をしつつ、学園についた響たちはそれぞれの教室に向かって行った。

ガラガラ

教室のドアを開けて中に入る響。そこに、

「あら？おはよう、響。朝早いのね？」

「おっはー、響っち！」

すでに登校していた理沙と薫が声をかけてきた。

「おう。おはよう理沙、薫。それを言ったらお前たちの方が早いだろ？」

「それもそうね。」

軽く返す響に答える理沙。

「ところでぇ～、昨日の放課後はどうだったの？なんか模擬戦をやったって話を聞いたんだけど？ホント？」

薫が待ってましたと言わんばかりに聞いてくる。

「まったく薫は・・・そんな情報どこから仕入れてくるのやら」

その様子に呆れる理沙。

「ああ。ホントだぜ。同じ班になるのにお互いの実力を知るためだってよ。俺と理沙、心と努でそれぞれ模擬戦をやったんだよ。」

「マジで！マジで！それで結果は？」

薫は結果が気になるのか、響に詰め寄っていく。

そこで響は理沙を見てニヤッとし、

「もちろん俺の勝ちだ。理沙も惜しかったがな。心も努に勝ったぞ。」

っと胸を張って言った。

「クッ！？」

っと悔しさで顔を歪めつつ、響を睨む理沙。

「おお～！？凄いね響っちと心っち。この学園でもトップの実力者の、理沙っちと努っちに勝っちゃうなんて。こりゃとんでもないライバル出現ですな？理沙っち？」

それに感心しつつ理沙に返す薫。

「ふんっ！あんなの偶々よ！努はともかく、私は次やったら絶対に勝つわよ」

「おんやぁ、理沙ちゃんは潔くないなぁ？・・・賭けの賞品、とんでもないこと要求してもいいんだぞ？」

ふてくされた態度の理沙に響は黒い笑みを浮かべながら、最後に理沙にしか聞こえないように耳打ちする。

「っ！？」

その耳打ちに、赤くなりながら響を睨む理沙。

「理沙っち？どったの？」

「クックック、なんでもないよなぁ？理沙ちゃん」

その後には、笑顔の響と俯く理沙、困惑顔の薫がいた。

「そんなことより、今日の放課後、歓迎会やるから」
なんとかダメージから回復した理沙は響に言った。

「は？歓迎会？誰の？」
いきなりの話題転換に思考がついていかない響

「それ、本気で言ってるのですか、響っち？もちろん、響っちと心っちの歓迎会に決まってるでし」
そんな響に突っ込む薫。

「そう言うこと。昨日は放課後は訓練場に集まれって言われてたからね。だから今日にしたの。ちなみに参加者は、アンタと心ちゃん、私に薫に、ついでに体力バカもね。」
そう言って参加者を指折りながら挙げていく理沙。ちなみに体力バカとは言わずもがな、努のことである。

「へぇ～、わざわざ悪いな。んで、場所はどこでやるんだよ？」
その言葉に感謝しつつ場所を尋ねる響。
その言葉に理沙が、

「響の家」
さっきの仕返しか、簡潔に答えた。

「はぁ！？」

「だから、響の家でやるの！！」

「ちょっと待て、それは分かった。何で俺の家なんだ？」
困惑しながらも理由を尋ねる響。

「だって、どっかの店でやると費用が高くなるし。響の家は心との2人暮らしでしょ？その点、私たちの家だと親がいてうるさいしね。それに明日は学園休みだから、泊まれるしちょうどいいかなって」
それにスラスラと答える理沙

「だからって宿主の許可も取らずに計画するか？普通」

「あら、許可なら取ったわよ？」

「はぁ？」
響の言葉に今度は理沙がニヤっとしながら言う。

「昨日の模擬戦の後にね。心ちゃんにだけど。」
その言葉に響はピキッっと固まる。

（こ・こ・ろ～！！帰ったら調ｋｙもといお仕置きだな・・・クケケケケ）
心の中でダークな笑いを浮かべる響。その時心が身震いしていたのは別のお話

「まぁ～心には、響には内緒にしてって言っておいたんだけどね。」

「そう言うことで、よろしくお願いしますね？響っち」

勝ち誇ったような笑みの理沙と薫が言う。

「あ～もう、分かったよ！勝手にしろ。」

自棄になる響、そこに先生が教室に入ってきた。

ガラガラ

「はいはい、席に着いて。出席採るわよ？」

「じゃあ、響放課後よろしくね」

「よろしくなのですよ！」

そう言って席に戻る2人。

「おう、分かった分かった」

それを響は諦めた表情で見送った。

ちなみに努は今日も遅刻し、担任の先生の呼び出しをくらったのは言うまでもない。

第8話：歓迎会

時刻は放課後

「おっしゃぁ。今週もこれで終わりだ！！」
ホームルームが終わった瞬間努が叫んだ。

「さぁ、行くわよ！響、薫、努」
理沙が張り切って言う。

「心っちと棗っちはどうするん？」
薫が言う。

「心と棗には校門で待ち合わせって伝えてあるわ。」

「わかった。待たせるのも悪いし、行くか。」
理沙の答えを聞き、響は答えながら鞄を手に取る。
そしてそのまま４人は教室を後にした。

校門

「あ！兄さんだ。棗ちゃん、兄さんたちが来たみたいだよ。」

「あ、そうみたいですね。」
校門ですでに待っていた心と棗は響たちに気付いて駆け寄っていく

「理沙先輩、努先輩、こんにちは。それから・・え～と・・？」
駆け寄った棗は理沙と努に挨拶をし、それから初対面の人を見て困惑する。

「私の名前は橋本　薫なのですよ。心っちですね？よろしくですよ」
それを見た薫は簡単に自己紹介をする。

「心『っち』？」
自分の呼ばれ方に疑問を持った心は響を見る
響は顔を横に振りながら
「諦めろ、心。こいつは誰に対してもこんな感じだ。」
と言った。

「は、はぁ。よろしくお願いします。薫先輩。」
それを悟った心は薫にお辞儀しながら言った。

「やっぱり、響っちの話から聞いて想像してた心っちよりだいぶ違うのです」
心を見て薫が言う。

「なんか昨日も同じ言葉を聞いたんですが、兄さんは私のことをどう説明したんですかねぇ？」

「だから、事実しか伝えとらん」
心の追及を響はかわす。

「はいはい、時間もなくなっちゃうからさっさと行くわよ。まずは買い物からね。男は荷物持ちよろしく」
そう言って自身が先頭に立ち歩いて行く。
その後を追うようにして４人は学園を後にした。

「ここが響の家か！？」

「うわぁ～、子供二人で住むにはちょっと大きいのですよ」

歓迎会の買い物を終え、響の家についた６人は神楽坂兄妹を除き、みんながその家に驚いていた。

焦げ茶の屋根に、見るからに新築だとわかる壁に表札。いわゆる一戸建てである。

「響っちたちって意外と金持ちだったの？」

当然の疑問を訴える薫。

響たちでさえも、この家を見た時は驚いていた。

響たちにとっても、この家は魔導教会から今回の仮住まいとして支給された物なので、二人で住むには大きすぎると思っていた。

しかし、本当のことを言う訳にもいかないので、そこは二人で苦笑しつつ適当に誤魔化しておいた。

「お邪魔しま～す！！」

玄関のドアを一番に開けた努は元気よく言った。

「うわぁ～、中も綺麗なんだね？心ちゃん。」
よく整理された玄関とその奥に見えるリビングなどを見て棗が声をかけた。

「とりあえず、私と努っち、棗っちで食事の準備をするべし。理沙っちは会場の準備ね。響っちと心っちは気にせずくつろいでて」
薫が指示を出す。

「私も何か手伝いましょ「頼むからお前はくつろいでてくれ！！」
む～～～」
手伝いを申し出ようとした心の口を塞ぎながら、響が慌てて割り込んだ。

「ふふ、いいのですよ。主賓を働かせるわけにはいかないのですよ。
それじゃあ、準備を始めるです。」
「おう！響、キッチン借りるな？」
「準備ができるまでゆっくりしていてください」
薫の言葉に腕まくりをした努が続き、その後に棗が続く。

そうして歓迎会準備が開始された。

薫たちに言われたとおりに、リビングでテレビを見てくつろいでいる響。心は自分の部屋で着替えている。
視線を動かすとキッチンから明かりが漏れ、３人の声が聞こえる。
時折美味しそうな匂いまでも漂ってくる。
グゥっと鳴るおなかを押さえながら、テレビに視線を戻す。

テレビでは今ニュース番組をやっており、最近多発する妖魔出現について専門家が偉そうに語っている。

その時、視界に赤い髪の女の子が目に入ったため、響はその女の子に疑問を口にした。

「そう言えば、なんで理沙は料理担当じゃなくて会場担当なんだ？」

突然の質問に一瞬こちらを振り向くが、すぐに顔を背けて言う。

「べ、別にいいじゃない！会場の準備がしたかったから志願したのよ。」

（わざわざ会場の準備を志願する人がいるだろうか？）

響は考える。

（志願したのではなく、志願せざるおえなかった。となると、その理由は？）

思考の末一つの答えに辿り着く。

「ほう、努が料理できるのもそうだが、理沙が料理できないなんて意外だな。」

確信したように理沙に言う。

響の言葉にギクッっと一瞬肩を震わせこちらを振り返り、

「な、何言ってるのよ。料理ぐらいできるわよ。ただ、アンタに食わせるのが勿体無いと思っただけよ」

全力で否定する。

「そうだったのか？まぁ、わざわざ人の家で歓迎会をやると言っといて料理ができないわけないよな。」

頷きながら納得したふりをする響

「そうよ、そんなわけないじゃない。」
ホッとしながら作業に戻る理沙。

「なら今度俺に弁当作ってくれよ？」
それを許さない響。

「はぁ！？何でアンタなんかのために私が弁当を作らなきゃならないのよ」
驚いたように振り向きながら言う。

そこで響はニヤっとしながら
「賭けの賞品はそれにしよう。」
っと切り札を出した。

「なぁ！？」
それを今日1番の驚きで見る理沙
そこで確信する。

（コイツ、私が料理できないのわかってて言ってたわね）
理沙にとって料理ができないのは一種のコンプレックスのようなものだ。
しかし、そこは負けず嫌いな理沙である。

「どうした、理沙？」

「クゥッ！分かったわよ作ってくればいいんでしょ！！月曜日に持っていくわよ。」
やはり乗ってしまうのだった。

「それじゃあ、皆さんグラスを持って〜！！神楽坂兄妹の藤歌学園編入に〜・・・かんぱ〜い！！」

カチャン

その後、料理も無事に完成し、努の音頭に合わせて一斉に乾杯する。テーブルにはフライドチキンやポテト、サラダ盛り合わせや焼きそばなど、色鮮やかな料理の数々が並んでいる。どれも美味しそうな見た目と匂いに食欲をそそられる。

「皆さん、今日は私たちのためにこのような会を開いていただきまして、ありがとうございます。ほら、兄さんも食べてバッカリいないで何か言ってください」

心が響に呆れ混じりに言う。

「んぐ！だってよ、この料理うまいんだもん。自分以外が作った料理なんて久々だしよ。みんな今日はありがとな！！このあとは家で楽しんで行ってくれ」

食べていた食べ物を飲み込んでから響が言う。

「フフ、ほめてもらえて嬉しいですよ、先輩。まだまだ沢山あるのでいっぱい食べて下さい。」

響の反応を見た棗が嬉しそうに言う。

「あ！？それ私が食べようと思ってたのに！！薫、それよこしなさ

い！！」

「ふっふっふ。理沙っち、こういうのは早い者勝ちと昔から決まっているです。そして勝負の世界は厳しいということも。パクッ」
理沙が手を伸ばしたフライドチキンを横からかすめ取る薫。
それを理沙が取り戻そうとするが、薫は見せびらかすように食べてしまう。

「くっ！！薫、食べ物の恨みは怖いわよ？」
意外と食い意地がはっている理沙であった。

現在の時刻は夜１０時

「おっしゃ～、そろそろ料理もなくなってきたし二次会としゃれこみますか、今日は無礼講じゃ～～～」
「おお！！わかってるねぇ、努っち。やっぱそうこなくっちゃ」
そう言って自分のカバンから日本酒を取り出す努。薫はどこから持ってきたのか缶ビールに缶チューハイをテーブルに並べていく。

「アンタらね、私たちは未成年よ？お酒はって何で注いでるのよ！？」

「固いこと言うなよ。それとも酒も飲めねぇのか？」

「それくらい飲めるわよ！！いいじゃない！飲みましょう。」
努の口車に乗せられ酒を口に運ぶ理沙。

「いいねぇ～。響もどうだ？」
自らも飲みながら一升瓶を響に差し出す。
「ああ、そうだな。もらおう。」
「お？結構いける口か？」
実は響は七聖「獄炎」との付き合いで小さいころから酒を飲んでいるので、酒には意外と強かったりする。
薫は薫で心たちに自分の持ってきた缶チュウハイを勧めている。
そしてこのあと響はこれらの行動を止めなかった自分に深く後悔する。

１０分後・・・

「こぉら響！こっちを向きなはい。私の話を聞いてましらかぁ？？」
「ぐお！？」
強引に響の顔を両手で挟んで自分の方に向ける理沙。
「響っち？響っち？何で男って生き物は女性を外見で判断するんでふかぁ～」
「ちょっ！？待て、薫！！首はヤメロ」
首に絡みつく薫を必死でどける。

「だぁから、はなひを聞けぇ！！」

「わかったから理沙。ちょっと落ち着けー！ぎゃぁぁぁ！！？」
そう言ってのしかかってくる理沙を説得するが、バランスが崩れ倒れてしまう。

「さっきから・・ヒック・・そう言って・・ヒック・・話を聞かないじゃないかぁ～／／」
響の上にまたがる理沙

「お前！ヤメッ！？おい、努。本はと言えばお前の責任だぞ！助けろ」
そう言って努を見る。

「いいんだ、いいんだ。俺なんてどうせ・・・」
そこには部屋の隅で丸くなっている努がいる。
その周囲だけ暗い空気が流れているのは気のせいではないのだろう。

「くっ！使えない奴だ。心は？」
そう言って反対側を向く

「棗ちゃ～ん。すりすり」
「やめて、心ちゃん。あっ！？そんなところ触っちゃダメ！！」
棗に抱きつきながら眠っている心と、抱きつかれながらも必死に抵抗する棗の姿があった。
少し危ない雰囲気が出てるので、響は眼を逸らす。

「くそ！味方はいないか！？こうなったら自力で抜け出すしかない。魔法を使えば・・・な！？バインドだと！！」

「フフフフ、逃がしゃないわよ。ひ・び・き」
「そうだよ響っち。しっかりワタヒの質問に答えてもらふのれふよ」
バインドを発動して魔力のロープで響を縛り上げた2人は不吉な笑みを浮かべながら響に近づいていく。
「オイお前ら、それ以上近づくな!?やめろよ、おい!!いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
その後響がどうなったかは定かではない。

第9話：星空の下で……

深夜・・・

響の家のリビングは酷い惨状だった。
ところどころに空き缶が、一升瓶が散らばり、そこには疲れてしまったのか5人が寝てしまっていた。
ところどころ服がはだけているのには目を逸らしておく。

「ふぅ、やっと静かになったか・・・」
なんとか自信を守り抜き疲れ切った響がポツリと言う。
あの後は大変だった。自身に掛けられたバインドを魔力を使って無理やり解き、尚も襲いかかってくる理沙と薫から逃げ続け１０分、ついに壁際へと追いやられてしまった響は、雷撃を放ち2人を気絶させたのだった。

「明日何も覚えてるなよ・・・」
切にそう思う響。覚えていた時のことを考えるとそれだけで背筋に寒気が走る。

そしておもむろに立ち上がり、庭へと続く窓を開け、そこへ腰かける。

「星が綺麗だ・・・」
空を見上げ感想を言う。空には三日月が浮かんでおり、雲が一つもなく星がよく見える。

「・・・・・」

どれくらいそうしていたのだろうか？
不意に後ろから声をかけられる。
「響先輩？」
声の主は棗である。
「起しちゃったかな？棗ちゃん」
振り返って言う響。
「いいえ！少し前から起きてて、それで先輩が起きたから、どうしたのかなって・・・隣いいですか？」
「え？ああ、うん。いいよ」
棗の問いかけが少し意外だったのか、少し驚きつつも承諾する響。
「失礼します」っと響の右隣に腰を降ろす棗。
「星をね、見ていたんだ。」
「とても綺麗ですね？星空。まるでどこまでも吸い込まれそう。」
フフっと笑顔で言う棗。
「星空って素敵ですよね。私は昔から悩み事があると星空を見るんです。考え事していても全部吹き飛んじゃうんです。なんか、お前たちはこの空の中じゃ、ちっぽけな存在なんだぞって言われてるみたいで。変ですよね？こう言うの。」
「そんなことないよ。俺にも似た経験がある。」
棗の言葉にそう返す響。
「何か、悩み事があるんですか？」

「え！？」
棗の言葉に今度こそ驚きを隠せない響。

「さっきの先輩の背中を見てると、どっかに消えてしまいそうで。ホントは声をかけないつもりだったんです。でも、それを見て居ても立ってもいられなくて・・・それで。」
棗が懸命に自分の思いを言葉にする。

「そっか。ありがとう。棗ちゃん。」
そう言って棗の頭を撫でる響。棗はくすぐったそうにしている。

「確かに、悩み事って言えば悩みごとかな？でも、もう答えは出てる悩み事なんだ。でもね、それを実行するのはちょっと怖い。」
そう言って悲しみを宿した目をする響。
その眼を見て何も言えなくなってしまう棗。

「・・・・」
「・・・・」

お互いに無言の時間が過ぎる。
沈黙を破ったのは棗だった。

「響先輩はどうして魔導士になろうと思ったんですか？」

「魔導士になった理由か～・・・」
棗の言葉に、どこか困ったように考える響

「私は昔ある人に助けてもらって。だからその人みたいに、助けられたらいいなと思って。私のような人を減らしたいなと思って魔導士になりました。」

自身の過去を少し話す棗。

「そっか、棗ちゃんは強いな・・・」

棗の理由を聞いて感心する響。棗が疑問に思い問おうとするが、その声は響によって阻まれる。

「・・・俺はその時、自分をそんな目にあわせた奴に対する復讐心しかなかった。・・・俺が魔導士になった一番の理由はね・・・復讐のため・・・なんだよ。」

そう言って今にも泣きそうな顔をする響。

棗はそんな響を見て抱きついた。

「おいおい!?棗ちゃん?大丈夫だよ。今はそんなこと考えてないから。理由は詳しく話せないけど、もう大丈夫だから。」

そう言って説得する響。

納得したのか棗は響から離れる。その棗の顔には涙が流れていた。

「やっぱり、棗ちゃんはやさしいな。」

心からそう思う響。

「・・・・・」

「・・・・・」

またも静寂が訪れる。

そして、今度は響がその静寂を打ち破った。

「棗ちゃん。俺のこともこれからは「響さん」って呼んでくれないかな?」

「え?」

質問がよく分からずに聞き返す棗。

「だってさ、理沙や努、薫には「さん」付けなのに、俺だけ「先輩」だったろ？この際だから俺も「さん」付けがいいなって」
その言葉に一瞬キョトンとした後、笑顔になり棗は言う。
「フフフ。はい、わかりました。響「さん」。」

「ありがとう」
改めて感謝を言う響。その言葉にはいろんな気持が乗っていた。

「さて、いくら夏だからってこれ以上外にいたら風引くかも。中に戻って寝ようか。空いてる部屋は自由に使っていいから。他の奴らは朝まで放っておこう。」
そう言いながら立ち上がる響。

「わかりました。響さん」
そう言って笑顔になり2人は家の中へと戻っていく。
後には空いっぱいに輝く星空が2人を見守っていた。

翌朝・・・

「お～いお前ら、いい加減に起きろ～！もう昼になるぞ。」

「う、うぁ～～」
響の声に理沙たちがもぞもぞと起きてくる。
「おはようございます、理沙ちゃん、薫さん、努さん」
「おはよ、棗。あぁぁぁ、頭が痛いよぅ」
「私もなのです」
「俺もだ」
棗のあいさつに頭を押さえながら返す3人。
「大丈夫ですか？回復魔法かけましょうか？」
「放っておけよ、棗ちゃん。そいつらは自業自得だ。」
棗の心配そうな言葉に、響は昨日のことを思い出しながら言う。
「兄さん、それはあんまりじゃないですか？理沙先輩、薫先輩、努先輩、お水をどうぞ。」
心がコップに水を入れて持ってくる。
「ありがとう、心」
「ありがとうなのですよ」
「ありがとな」
礼を言う3人。
「それより、何で心ちゃんは大丈夫なんですか、響さん？昨日はあんなに酔っぱらっていたのに。」
心の態度を疑問に思った棗が声をかける。
「心も昔にちょっとな・・・あまり追及しないでくれ。」
昔、「獄炎」に付き合い飲まされたことを思い出しながら言う響。

実は心も昔にかなり飲まされた経験があるのだ。
その経験によって、酒には弱いが、その後の回復力が半端なく良くなってしまったのである。

「ん？ちょっと待てよ。何で棗ちゃんが響のことを「響さん」なんて呼んでるんだ？」
「あれ？そう言えば昨日までは「響先輩」だったのですよ。」
棗の響に対する呼び方を疑問に思った努と薫が口にする。

「ん？ああ！昨日の夜、お前らが寝ちまった後にちょっとな。いつまでも俺だけ先輩って呼ばれるのも何か変だろ」
「なので響さんって呼ぶことにしたんです。」
響の説明に頷きながら棗が受け継ぐ。

「兄さん？私の棗ちゃんを取ったりしたら許しませんよ？」
「え！？」
響たちの説明を聞いていた心が言い、棗が驚く。

「別に取りはしないよ。ほほぅ。心と棗ちゃんはそう言う関係だったのか。気付かなかった。棗ちゃん、心を頼むな！」
「え？えぇぇ！？」

「よかったね、棗ちゃん。兄さんの公認も頂いたことだし、これからは堂々とラブラブできるよ」
「な、何の話をしているんですか、心ちゃん！！響さんも乗らないで下さい～～！！」
棗の叫びが響の家に響き渡る。
そしてみんなの笑い声が巻き起こった。

こうして響と心の幕を閉じて行った。

第１０話：初挑戦（前書き）

久しぶりの更新です。

就活やら、卒論やらで忙しく更新スピードが遅いですが頑張ります。

第１０話：初挑戦

朝・・・

「う、う～～ん・・・」
ぼやけた視界を手で擦りながら彼女は眼を開ける。
そして時計を確認し、普段はまだ寝ている時間であることを認識し、ベットから起き上がる。

２階の自分の部屋から出て階段を降り、リビングに入る。
そこには普段自分が起きた時にはもう家を出ている父と母の姿があった。

「あら？今日は珍しく早いのね？理沙」
「おや、本当だ。いつもは私たちが出かける時に起こさないと起きてこないのに。」
リビングに入ってきた娘をみて驚きながら声をかける２人。
母の名前は明美（あけみ）、父の名前は輝義（てるよし）である。

「おはよう、父さん、母さん。今日はちょっとお弁当を作ろうと思ってね。」

「あらあら、理沙がお料理なんて、それこそ珍しい。そう言えば昨日大量に食材を買ってたわね。もしかして男でもできたの？」
「何！？おい理沙。その男はきっと悪い奴だぞ！！騙されるんじゃない。」
理沙の言葉に女の感を働かせる母と、それを聞いて狼狽する父。
「そんなんじゃないわよ！ただちょっと約束しただけで、響とはそ

んなんじゃ・・」

「聞きました、アナタ？響ですって。それってこの前転校してきたって子じゃない？」

「お父さんは許さないぞ～～」

自ら墓穴を掘る理沙、それをネタにからかう母。父に限っては泣きだす勢いである。

「もう、違うって言ってるでしょ！ほら、さっさと行かないと仕事に遅刻しちゃうよ。今日は昨日出現した妖魔の報告書出さなきゃって言ってたじゃない。」

実は、明美と輝義は魔導教会で働いている魔導士であり、明美は「光麗（こうれい）」輝義は「豪砕（ごうさい）」の二つ名をもつ優秀な魔導士で、理沙たちの住んでいる地域を統括する魔導教会の最高責任者でもある。２人それぞれが魔導士ランクＳとかなりの実力者である。

ちなみに、二つ名を持っている魔導士のことを「名持ち」と言い、他の魔導士からは一目置かれる存在である。

「フフ、それもそうね。それじゃお母さんたちは行くけど、火の扱いには気をつけるのよ。ほらアナタ。行くわよ。」

「理沙～～。いつまでも私のそばに居てくれぇ～～」

本人たち、特に父を見ていると、そうとは思えないが・・・

母に首を掴まれて引きずられていく父。

「まったく、母さんたちは・・・さてと、材料は昨日買っておいたし、後はこのお料理本通りに作れば問題なしね。」

そう言って昨日材料を買う時に一緒に買っておいた本を袋の中から取り出す理沙。

タイトルには「誰でも簡単、必殺手料理」と書かれている。
料理で必殺してどうするのか、っと言う突っ込みは最早言うまい。

「よし！やりますか。まずは何を作るかね・・・アイツは何が好きなのかしら？」
お料理本をめくりながら考える理沙。
そしてあるページでその手を止めて、少し眺めてから勢いよく立ちあがり作業に取り掛かる。

そのページにはこう書かれていた。
「男の子ならこの料理で間違いなし！！これであの子のハートもゲット確実！！」

2時間後・・・

「で、できた・・・」
理沙の手元には1つの弁当箱が。そして水筒が握られていた。
キッチンには野菜の皮や調味料などが散らかっており、壮大なバトルがあったことがうかがえる。

「時間は・・・ヤバッ！？もうこんな時間！」
時計を見た理沙は急いで制服に着替え鞄を持ち学園へと向かって行った。

ガラガラ

「はぁ、はぁ、セーフかしら。ふぅ」

時刻は始業5分前。

教室の中は談笑するクラスメートの声で一杯だった。

そんな中に扉を開けて入ってきた理沙は、荒れている息を落ち着かせながら言った。

「おお、おはよう理沙っち。理沙っちがこんな時間に登校なんて珍しいね？」

ダッシュで教室に駆け込んできた理沙を見て薫が声をかける。

「はっはっは！どうした理沙？俺よりも遅いなんて。寝坊でもしたか？」

すでに登校していた努が胸を張って言う。

「くっ！？屈辱だわ、努なんかに言われるなんて。アンタと一緒にしないでよ！私はちょっと用事があっただけよ。」

「ふむ、用事だと言っても遅刻はしちゃいかんだろ。ギリギリで間に合ってはいるが」

屈辱から握り拳をつくって肩を震わせていた理沙に響が声をかけた。

（むかぁ～！こいつは誰のせいだと思って・・・）

響の言葉に内心でイラついている理沙。

しかしその思いを声に出すまでもなく、担任の先生が入ってきたことで会話が打ち切られた。

そしてそのまま朝のホームルームが始まり各自の席へと戻って行った。

昼休み

「よし！飯だ～、パン買ってくるぜ！！」
授業の終わりのチャイムが鳴ると同時に努がダッシュで教室を出ていく。
それに続く形で何人かの生徒がダッシュしていく。
普段はそこに理沙の姿もあるのだが、

「およ？理沙っちは今日は購買に行かないのですか？」
チャイムが鳴ってもいつまでも教室から出ていかない理沙に薫が問いかける。

「うん・・今日はちょっとお弁当を作ってきたんだ。」
「おお！？理沙っちがお弁当を？何故に？」
理沙の返答に驚く薫。
理沙は普段から購買のパンを買って食べており、料理なんてしたことがないのを知っているからである。

「この前言ってた響との賭けの賞品が、何故か私の手作り弁当になっちゃってね・・・悪いんだけど薫、今日は努と2人で食べてくれない？」
どこか恥ずかしそうに薫に事の顛末を言う理沙。

「ほほう！そう言うことですか。理沙っちの愛妻弁当を食べた響っ

ちの反応を見れないのは残念ですけど、了解したのですよ。」
「愛妻じゃない！！まぁ、頼んだわよ。」
薫にお願いして自分は響の席へと向かっていく。
「理沙っちの手作り弁当・・・どんな出来栄えか気になるのですよ。あとで響っちにインタビューしてみよっと」
後には今日これからの予定を立てる薫がいた。

「ね、ねぇ響？」
「ん？」
薫にお願いした理沙はそのまま響の席に来ていた。
若干緊張した様子の理沙を訝しげな眼で見る響。
「こ、この前約束したお弁当・・・作ってきたから」
「お、まじか！？まさかお前それで今日遅刻ギリギリだったのか？」
「そ、そうよ。・・・悪い？」
今日の朝の出来事を思い出し問う響に、少し機嫌を悪くした理沙が返す。
「いや、そうか。悪かったな。朝はまさかお前が俺に弁当を作って遅刻しそうになったとは考えてなかった。すまん」
そう言って素直に頭を下げる響。

まさか素直に謝られるとは思っていなかったのか、その態度に理沙は驚きながら
「ま、まぁ、別にもういいわよ。それより中庭で食べましょう。」
っと提案する。

「ん？ここじゃダメなのか？」

「ここじゃ恥ずかしいでしょ。まるで私がアンタのためにわざわざ自主的にお弁当を作ってきたみたいじゃない！！。」

「ふむ。それもそうか。それじゃ行こうか。もたもたしてると昼休みが終わっちまう。」
理沙の説明に納得した響は理沙と2人で教室を出て行った。

しかし、そんな二人の姿を見たクラスメートたちが、どちらにせよ誤解したのは当然である。

2人は中庭にあるベンチに腰かけていた。
外の日差しは強いため、木の陰に隠れ、休憩するにはちょうど良いベンチだ。
周りには何組かのカップルと思われる男女が同じように弁当を食べている。

「はい」
そう言ってカバンからハンカチで包まれた弁当箱を手渡す理沙。

かおは響を見ておらず、耳のあたりが少し赤くなっている。

「ありがと。さてと中身はどうなってるのかな？」
それを受け取った響は楽しそうに弁当を包んでいるハンカチをほどいていった。
そしてハンカチがほどき終わり、弁当の蓋を開ける。
そこには、

「・・・・・・・」
一面白い世界が広がっていた。

「なぁ、理沙？これは料理ができない理沙に弁当を作って来いといった俺への当てつけか？それとも本当に一生懸命作ってこれだったのか？弁当箱いっぱいにご飯はないだろ。せめて梅干しでも乗っけて日の丸弁当にしてくれよ・・・」

そう、弁当箱の中には米しか入っていなかったのである。
流石の響もこれは予想外だったらしく、どうコメントすればいいのか迷っているようだ。

「そ、そんなわけないでしょ！！ほら、これ！！」
慌てて鞄から水筒を取り出す理沙。

「ん？水筒？それをどうするんだ？」
さらに困惑する響。

「こうするのよ。」
水筒の蓋を開け、その中身を弁当箱の中のご飯にかける理沙。
その水筒の中からは、湯気を立てた茶色の液体上のものが出てきた。
辺りにはいい匂いが広がる。

「おう!?これはカレーライスか!!まさか弁当にカレーをチョイスするとは。」
驚きを浮かべる響。

「しょうがないじゃない。初心者用の本に載ってたんだから。それに男の子はカレーが好きだとも載ってたし。」
必死に弁解しようとする理沙。

「いや、少し驚いたが、これはこれでありだろう。それじゃせっかくだし、いただきます。あむ・・・」
そう言って一口口に運ぶ響。
そして少し考える。

「・・・どう?・・・」
若干俯きながら、響の反応を気にする理沙。
その顔には不安の色が浮かんでいる。

「ふむ。若干、野菜に火の通りが悪いな。歯ごたえがジャリジャリ言ってるぞ。あと、人参の皮は剥くものだ。」

「うぅ・・・」
考えた末に正直に料理を評価する響。その答えを聞き、さらに俯いてしまう理沙。
(やっぱ、私には料理は向かないわね・・・)
などと考える理沙。

「あむ。モグモグ・・・だが美味しいぞ。」
二口目を口に運びながら言う響。

「え！？」
その言葉に俯いていた顔をあげ、信じられないものを見る目で見る理沙。

「料理って言うのはなにも、味だけですべてが決まるものではない。もちろん、レストランなんかじゃ味が一番重要だが、こう言う弁当で重要なのは『心』だ。」
理沙に言い聞かせるように言う響。
その声にはどこかやさしさが宿っている。

「『心』って・・・な、何恥ずかしいことをサラッと言ってんのよ！」

「あむ・・・だが事実だろ？現に今日はこれを作るために遅刻ギリギリまで粘ってくれたんだし。」
理沙は顔を赤くしながらも響に返答するが、響はさらにカレーを口に運びながら即答する。

「そ、それは・・・どうせ作るなら美味しいって言わせたいじゃない。」

「そう。それだよ！料理で一番大切なのは、美味しく食べてもらいたいって言う気持ちだ。その気持ちがあれば、きっと上達するさ。この弁当にもその気持ちがちゃんと入っている。だから俺は美味しいと感じたんだ。」

観念したように今日の朝の心境を語る理沙。
それに響は感心し、理沙に返す。

「あ、ありがと／／／そんなこと言ってくれたのはアンタだけよ。

私は料理だけは昔から苦手でね。今までもあまり作る機会がなかったし・・・」

「ふむ。それじゃぁ、俺が理沙に料理を教えてやろうか？俺は昔から家事とかやってたから得意だぜ。」

「え！？いや、でもそれは・・・」

「キッチンは俺の家のを使えばいいし、材料は割り勘な！時間が取れる時がいいから、毎週土曜日なんてどうだ？なんだったら食材の買い物の仕方から教えてやるぜ？」

理沙の言葉を無視し、1人でどんどん話を進めていく響。
日取りまで勝手に決められた理沙は、口をはさむタイミングを完全に失い戸惑っている。

「え？あ、え～と・・・お、お願いします？」
いつもの強気な態度がなりを潜めて、恐縮した態度を取る理沙。
なぜか語尾が疑問形であった。

「ふっ、任せろ！これからは俺のことを師匠と呼ぶがいい」

「ちょ、調子に乗ってんじゃないっ！！」
響の態度にいつもの調子を取り戻し、肘打ちを放つ理沙。
響はとっさにそれを避ける。手に持ったカレーを少しもこぼさないあたり伊達に七聖を名乗っているわけではない。

「ほら、理沙。お前は俺の弁当でも食べろよ。早く食べないと時間がなくなるぞ？」
言いながら自分の弁当を理沙に投げる響。

それに何か言いたげながらも理沙は弁当を受け取り、蓋を開ける。
そこには色とりどりのおかずと、サンドイッチが入っていた。

「うわっ！すごっ！！これ本当にアンタが一人で作ったの？・・・・
あむ。しかも美味しいし・・・」
その料理の見た目と味に感嘆の声を洩らす理沙。

「もちろんだ。栄養バランスから、カロリー計算まで完璧だぜ。理沙も練習すればそれくらいなら簡単に作れるようになるさ。さ、さっさと食べて教室に戻ろうぜ。」

「う、うん・・・ねぇ、響？」

「ん？」

「ありがと／／／」
そっぽを向いて赤くなりながら言う理沙。

「はは！珍しいな。素直に礼を言うなんて。」

「うるさいわね！もう・・・」

その後響と理沙は急いで弁当を食べて教室へと向かって行った。
教室に戻った二人にクラスメートからの質問の嵐が待っていることを知らずに・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5317h/

雷の覇者

2010年10月12日04時07分発行